2022

文集　はと笛

令和４年度 第53回
弘前市小・中学生読書感想文コンクール
入　選　作　品

文集　はと笛

二〇二二

弘前市立弘前図書館

弘前市立弘前図書館

文集

はと笛

二〇二二

令和４年度　第五十三回
弘前市小・中学生読書感想文
コンクール入選作品

審査の先生

弘前市立郷土文学館　企画研究専門員　櫛引洋一
弘前市国語教育研究会　地主尚子
弘前市国語教育研究会　佐藤信孝
弘前地区小学校学校図書館教育研究会　小山内早苗
弘前地区小学校学校図書館教育研究会　田村修
弘前地区中学校教育研究会国語部会　野宮夕加
弘前地区中学校教育研究会国語部会　福田裕子
弘前地区中学校教育研究会国語部会　佐藤真紀子

※協力機関　弘前地区中学校教育研究会国語部会

（順不同・敬称略）

巻頭言　ひとり灯（ともしび）のもとに

弘前から少し離れた温泉街に生まれ育った私にとって、少年の頃の読書の記憶もその街の思い出とともにあります。

……家族が電灯を消して寝静まった頃、近くを流れる川のせせらぎの音が聞こえて来ます。瀬音は次第に高くなり、夜の闇の果てまで響きわたるようにも思われました。時折、夜汽車の走る音が遠くに聞こえ、そして消えていきました……

静まりかえった部屋で、会ったこともない遥か昔の人や、遠く離れた外国の人が書いた本と出会い、その文章に心躍らす時間は、まさに「至福（しふく）の時」でありました。

それから約十年後、弘前市内の高校に進み、古典の時間に兼好法師の随筆集『徒然草』の第十三段を読んで心がふるえました。

「ひとり灯（ともしび）のもとに文（ふみ）をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわざなる。」

夜も深まり、ひとり灯のもとで、出会うこともない遠い昔の人が書いた書物を読み心の友とする時、このうえもなく心が慰められる、という意味です。今から七百年以上も前の文章なのにそれが小学校時代の自分の経験と重なり、まさに兼好法師が私にとっての「見ぬ世の人」となり「友」となったのです。

このような「読書の歓び」は、その感動を文章に書き綴ることでより確かなものになります。読書感想文を書くということは、自分一人の「感動」をより多くの人に伝えるために、その感動を自分の心にあらためて問い直し表現や構成の工夫をするなど、相当な苦労をともないます。しかし、そのことで皆さんの感動の姿がより確かなものとなり、心の中にかけがえのない一つの「灯（ともしび）」をともすことになるのです。それは、これからの皆さんの人生に、目に見えない形で深さや豊かさをもたらしてくれるかけがえのない「灯」です。

昨年の授賞式の講評で、十八世紀イギリスの詩人・作家であるオリバー・ゴールドスミスの言葉「良書を初めて読むときには、新しい友を得たようである。」（『世界市民』）を紹介しました。皆さんが「見ぬ世の友」と出会い、その感動を書き綴った読書感想文が、何十年、何百年かのちの「見ぬ世の友」へのメッセージとなるのかもしれません。

審査委員代表　櫛　引　洋　一

第五十三回　弘前市小・中学生読書感想文コンクール　入選作品

文集はと笛　二〇二二　目次

巻頭言　櫛引洋一

小学校

◎三年の部

第一席　『くもの糸』を読んで　弘前市立福村小学校　石岡実結　9

第二席　「がんばらなくてもいいんだよ。」　弘前大学教育学部附属小学校　泉愛菜　10

第三席　人間はいいものなのか　弘前大学教育学部附属小学校　中井太陽　11

佳作　「人を信じる心」　弘前大学教育学部附属小学校　佐藤理花　13

佳作　モリーの愛情　弘前市立豊田小学校　千葉悠杏　14

佳作　楓くん、がんばったね　弘前大学教育学部附属小学校　境紗葵　15

◎四年の部

第一席　幸せを考えて　弘前大学教育学部附属小学校　對馬朋笑　17

第二席　親子のきずな　弘前市立文京小学校　鈴木優衣　18

第三席　研究って楽しいな　弘前大学教育学部附属小学校　別宮志郎　19

佳作　すてきなココロになるために　弘前市立大成小学校　水野瑛梨　21

佳作　ため息一緒に調べませんか？　弘前大学教育学部附属小学校　鷺坂美采　22

佳作　読書はゲームだ!!　弘前市立大成小学校　千葉心寿　23
佳作　『かあちゃん取扱説明書』　弘前市立豊田小学校　今本琳太朗　25
佳作　大好きなおじいちゃん　弘前市立文京小学校　古川隆惺　26

◎五年の部

第一席　マタギのおきてから学んだこと　弘前市立大成小学校　高山京慧　27
第二席　願いをかなえるためには　弘前大学教育学部附属小学校　三上剛史　28
第三席　みんなハッピー　弘前市立城西小学校　小林摩幸　29
佳作　東日本大しん災から学んだこと　弘前市立堀越小学校　白戸咲綾　31
佳作　人にやさしくすることの大切さ　弘前市立大成小学校　阿部紘子　32
佳作　ぼくだってマルクのように　弘前大学教育学部附属小学校　成田歩生　33

◎六年の部

第一席　どうして勉強するんだろう　弘前市立東小学校　佐々木貴人　35
第二席　『ぼくらの太平洋戦争』を読んで　弘前市立福村小学校　山田絵琳　36
第三席　自分の「好き」には正直に　弘前市立福村小学校　成田航陵　37
佳作　自分を好きになるために　弘前大学教育学部附属小学校　吉田蒼汰　39
佳作　こわいものがありすぎて…　弘前市立北小学校　髙橋遼馬　40
佳作　希望の力　弘前大学教育学部附属小学校　花田慎之助　41

中学校

◎一年の部

第一席　やっぱり何でも勉強につながる　弘前大学教育学部附属中学校　鷺坂祐将　45
第二席　自ら気付く幸せ　弘前市立第三中学校　小堀和華　47
第三席　自分を大切にすること　弘前大学教育学部附属中学校　中井結衣子　49
佳作　見る　弘前大学教育学部附属中学校　大瀧実結　51
佳作　『孤独と不安のレッスン』　弘前大学教育学部附属中学校　鈴木春汰　52
佳作　多様性の大切さ　弘前市立東中学校　小野史織　54
佳作　『カラフル』　弘前市立南中学校　三浦心華　56

◎二年の部

第一席　心から向き合うこと　弘前大学教育学部附属中学校　久保心晴　58
第二席　久蔵と共に願う　弘前市立南中学校　中田吏紀　60
第三席　時代を創った葛飾北斎　弘前大学教育学部附属中学校　橋本和香　62
佳作　本当の家族への旅　弘前市立第四中学校　石戸たまき　63
佳作　「勇気の剣を手に入れるために」　弘前大学教育学部附属中学校　赤石三奈美　65
佳作　彼女のように　弘前市立南中学校　相馬一護　67

◎三年の部

第一席　自由と平和　弘前大学教育学部附属中学校　成田充希　69
第二席　死について考えること　弘前大学教育学部附属中学校　平賀寛菜　71

第三席　誰もが自分らしくあるために　弘前市立第五中学校　八木利菜　73
佳作　私の読書考　弘前大学教育学部附属中学校　豊岡実欧　75
佳作　『黒い雨』を読んで　弘前大学教育学部附属中学校　花田萌維　77
佳作　お話に花をさかせて　弘前大学教育学部附属中学校　高橋彩　78
応募作品審査講評……81
努力賞一覧……90
感想文の対象となった図書……91
読書感想文コンクール応募学校と応募作品点数の推移……97
第53回（二〇二二）読書感想文コンクール応募作品数……97
令和４年度第53回弘前市小・中学生読書感想文コンクール応募要項……98
編集後記……99

編集にあたって

一、作品の中で使用する漢字は、小学校の場合、それぞれの学年の教育課程に応じたものを用い、学年を超えるものについてはふりがなをつけました。
　中学校の場合は、常用漢字表以外のものについてはふりがなをつけました。

一、感想文のタイトル中に、対象となった作品が掲げられている場合は、作品を示す記号として『』に統一しました。

一、感想文のタイトルにサブタイトルがある場合は、区別する記号として～　～を付けることで統一しました。

一、感想文のタイトル中に強調の意味で「」が使用されている場合は〝〟に置き換えました。

一、感想文のサブタイトルに「〇〇を読んで」とある場合は、これを省略しました。

小学校

三年
四年
五年
六年

の部

『くもの糸』を読んで

弘前市立福村小学校　石岡実結

この本のタイトルは、『くもの糸』です。わたしのきらいな虫のくもです。カブト虫やダンゴ虫はかっこよくてかわいいのですきです。くもがきらいな理由は、見た目がきもちわるくて、糸がネバネバして、どこにでもすを作ってしまうからです。

この物語の主人公のカンダタは、大どろぼうで人ごろしです。小さなくもを見つけたカンダタが、「いやいやこれも小さいながら命あるものにちがいない。その命をむやみにとるということはいくらなんでもかわいそうだ。」と、やさしい心をもってくもをたすけた事がありました。わたしだったら、きもちわるいとくもをたすける気にならなかったと思います。

おしゃか様は、あく人のカンダタの中にもやさしい心がある事を知っていて、カンダタをたすけようとくもの糸を地ごくに下ろしてくれました。もしかしたら、カンダタが地ごくにおちたことを知って、たすけられたくもが、おしゃか様にカンダタの事を教えたのかもしれません。カンダタは人ごろしですが、よく考えると小さいくもの命をたすけるやさしい心をもっている人だと思いました。

くもの糸は細くて切れやすそうです。きっと、カンダタの心の中にあるやさしい心も、くもの糸みたいなのだと思います。だから、カンダタがほかのざい人が自分の後ろにつづいてくるのをやめさせようとした時、さい後にのこっていた、やさしい心の糸も切れてしまったのかなと考えました。

今、せかい中でせんそうや、わるい事をする人がたくさんいます。ニュースを見ていて、どうして同じ人げんなのに人をきずをつけたり、ころしたりするのだろうと思っています。本当はわるい事をする人の心の中にも、カンダタのように細くて切れやすそうなやさしい心がのこっているかもしれません。けれども、自分だけよければ、ほかの人がどうなってもいいという気もちが大きくなると、細くて切れやすいくもの糸のようなやさしい心が、ぷっつりと切れてしまうのだと思いました。

せかい中の人の細くて切れやすいやさしい心を、少しずつつなげて太い糸にして、大きくて切れにくい、やさしいくものすができたらいいと思います。わたしは、きょ大くものすで、わるい事をしようとしている人をネバネバの糸でつかまえて、せんそうがおきているところの人たちを、やさしい糸でつつんでたすけてあげたいです。

この物語を読んで、わるい人の心の中にもやさしさがあること、おしゃか様のように、わるい人をたすけることにも意味があることを学びました。わたしもわるい心にまけそうな時、くもの糸を思い出して、太くて強いやさしい心を作りたいと思いました。

小学校三年の部　第二席　――――――　対象作品／フランツ＝ヨーゼフ・ファイニク著『わたしの足は車いす』あかね書房

「がんばらなくてもいいんだよ。」

弘前大学教育学部附属小学校　泉　愛　菜

「がんばってね。一生けん命がんばって。」

もし、わたしのクラスにアンナのような友だちがいたら、きっとわたしは、こんなふうに声をかけてはげましていたと思います。

でも、それはアンナにとって、本当にうれしい言葉なのかな。わたしは、本を読んでいるうちにそう思い始めました。

アンナは、生まれつき足がマヒしていて、両足とも動きません。

わたしは、両足でスキップをしてみました。足が自由に動いて、ちゃんとできます。もし足が動かなければ、歩くことも泳ぐこともできないと思うと、とてもこわくなりました。一人では何もがんばれないかもしれません。

でも、アンナは「みんなから、何もできない子だと思われたくない。」という気もちで、いつもがんばっています。一人で着がえもできるし、お母さんのおつかいで買い物だってできます。自分の気もちをだれにも分かってもらえなくて悲しかった時も、がんばって、こっそりなみだをこらえました。

わたしはこの時、はっと気がつきました。アンナは友だち

に「がんばってね。」なんて言われなくても、もう一人でじゅうぶん一生けん命がんばっているということに。そして、時々がんばりすぎてしまっているということに。

アンナは、本当は何も病気のない子になりたくてたまらなかったし、くやしかった。そして、「かわいそうな子」「ふつうとちがう子」と思われるのが、とても悲しかったのだと分かりました。それなのにアンナは、

「生まれつきだからしょうがない。」

そう自分に言い聞かせて、がんばっていたんだと思います。でも、本当は心の中でずっと泣いているのです。だから、ジギーが太っていることをバカにされた時、「他の人とちがうからってバカにするのはよくないわ。」と、はらが立ったのです。アンナも人とちがうから、ジギーの気もちがよく分かるのです。

わたしは、アンナが友だちに「がんばってね。」と言われたら、「こんなにがんばっているのに、これ以上何をどうやってがんばればいいの。」と泣きたくなるような気がしました。

そして、アンナにどんな言葉を言ってあげるか、もう一度じっくり考えてみたら、新しい答えが出てきました。それは、

「もう、がんばりすぎなくてもいいんだよ。」

「泣きたい時には、がまんしないで泣いてもいいんだよ。」

この二つの言葉です。

そして、アンナががんばりすぎなくてもいいように、わたしができることをお手伝いしたいと思いました。クラスのみんながお手伝いをすれば、「一足す一が二」になるように「たくさんのお手伝い」になるし、アンナが泣いたら、みんなの手でだきしめてあげれば、泣き顔はきっとすぐに笑顔にかわるから。

小学校三年の部　第三席

人間はいいものなのか

弘前大学教育学部附属小学校　中井太陽

対象作品／新美南吉著『手ぶくろを買いに』偕成社

「ふんわりしていてかわいい絵だな。」

本の表紙の、母さんぎつねが子ぎつねの手をにぎっている

絵がとてもかわいかったので、この本を読んでみたいと思いました。

ぼくが一番好きな場面は、

「母ちゃん、目に何かささった、ぬいてちょうだい、早く早く。」

と、子ぎつねが母さんぎつねの所にころげて来たところです。目には何もささっていませんでした。お陽さまがキラキラとてらしていて、雪がまぶしいほど反射していたのです。あまりに強い反射をうけたので、目に何かささったと思ったのです。その、「何か目にささった」という作者の表げんが、読んでいる人たちをおどろかせて、おも白いな、と思いました。

ぼくが一番ドキドキした場面は、子ぎつねがまちがって本当の手を出してしまったところです。ぼくは、母さんぎつねが言っていたおそろしい人間に、子ぎつねがつかまってしまうのではないかと、とてもドキドキしました。子ぎつねは、光がまばゆくて、めんくらって、まちがった方の手を出してしまい、ぼくは、どじだけどちょっとだけかわいいな、と思いました。お金が木の葉ではなく、本当のお金で、母さんぎつねはよく本当のお金を持たせてくれたな、と思いました。ぼうし屋さんが毛糸の手ぶくろを持たせてくれて、ほっとしました。

「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら。」

と、母さんぎつねはつぶやきました。ぼくはさいしょ、きつねをおいはらう人間を、おそろしくてひどいと思いました。けれど、母さんぎつねの友だちは、あひるをぬすもうとしたのでおいはらわれました。人間もきっと、きつねがいたずらをしたり悪いことをしなければ、おいはらったりつかまえたりしないのではないかと思いました。「人間はこわくなくて、やさしいところもあるよ。」と、母さんぎつねにつたえたいです。

小学校三年の部　佳作

対象作品／大石真著『チョコレート戦争』理論社

「人を信じる心」

弘前大学教育学部附属小学校　佐藤理花

もしも私が桜井先生だったら、まずさいしょに、明と光一をうたがいます。なぜかというと、ショーウィンドウのまわりには誰もいないし、どうきもあるからです。どうきとは、光一がシュークリームを買えなかったことです。ですが、桜井先生はさいしょから明と光一を信じました。私は、桜井先生がどうしてそんなことをできたのかふしぎでたまりません。

この本の作者が伝えたかったことは何でしょう。私は、「人を信じる心」が大切だと言っている気がします。「うたがう心」も大事ではありますが、そればかりでは、友だちにきらわれてしまうかもしれないからです。人を信じるというのは、心が広いということだと思います。いつもわるさをしている人が、いつもわるいとはかぎらないからです。私も、そういう心の広い人になりたいです。

この本には、名言が一つあります。同じような言葉はほかにもありますが、この言葉にひかれました。

「まず、てきのようすを知ることだ。」

これは、光一の言った言葉です。かっこいいし、ほかのセリフよりなんとなくかがやいてみえたのです。私も、この言葉を日ごろからつかってみたいです。

本のさいごに、チョコレートのしろをぬすみだした光一、一郎、二郎、晴男ですが、ほんもののチョコレートのしろではないことを知り、ずいぶんはずかしかったと思います。金泉堂をこらしめるどころか、自分たちが店のせんでんをしてしまったのです。光一はくやしがるだけで、あきらめたけど、もう一どほんもののチョコレートのしろをぬすみだしてほしかったです。

私に、光一たちのようにチョコレートのしろをはこびだす勇気はありません。大人たちにおこられるのがこわいからです。もし私だったら、自分がやっていないしょうこをあつめて、こうぎしにいきます。

さいごに、ときどき私は、人をうたがってしまうことがあります。この本を読んで、「人を信じる心」を身につけよう

と思いました。

小学校三年の部　佳作　――――――　対象作品／アーネスト・トンプソン・シートン著『ワタオウサギのラグ』童心社

モリーの愛情

弘前市立豊田小学校　千葉悠杏

わたしがこの本を読もうと思ったきっかけは、図書館です。前にシートン動物記のロボを読んだので、同じシリーズのほかの動物も読んでみたいと思いました。

この本は、アメリカの動物学者のシートンさんがワタオウサギを観察（かんさつ）したものです。ラグと名づけたオスのワタオウサギとそのお母さん、モリーが書かれています。森の中でこの親子は命がけの日々をすごしていきます。

この本を読んですごいなと思ったところは、モリーがラグに、てきから身を守る方法を教えているところです。シートンさんは、モリーからラグへつたえられた知恵とわざは何百もあると書いていましたが、その中で私がとくに気になったのは二つです。一つめは、〝じっとふせて声をださない〟です。動かなければ、てきからいないものと思われるそうです。こわいじょうきょうで、よくじっとできるなと思いました。

二つめは、〝ジグザグ〟です。急角度で次々に走る方向を変えれば、てきにおいを追われないですむそうです。自然の中で生きていくために、ウサギはいろいろなわざを身につけていて、すごいなと思いました。

また、モリーがラグを助けるところがとても感動的でした。キツネに食べられそうになったとき、モリーがつめたい池にとびこんでキツネの注意をひき、ラグをにがしたのです。ラグは助かりましたが、モリーは死んでしまいました。自分をぎせいにして子どもをすくったモリーの深い愛情（あいじょう）が感じられました。

この本を読んで、大きくなったら私もモリーのように自分の子どもにいろいろなことを教え、まわりのお友達や家族を大切にしていきたいと思いました。

小学校三年の部　佳作

対象作品／小手鞠るい著『ひかる石のおはなし』あかね書房

楓くん、がんばったね

弘前大学教育学部附属小学校
境　紗葵

私がこの本をえらんだ理由は、学校からもらった夏休みのおすすめの本の中にあって、表紙の絵がえい画みたいでおもしろそうだったからです。

この本の登場人物は、小学生の楓くん、お父さん、そして、天国にいるお母さんです。

このお話は、主人公の楓くんのお母さんが、きゅうになくなってしまったけれども、楓くんが、学校の帰り道でひろったひかる石に毎日話しかけて、その悲しみをのりこえていくお話です。

私が心にのこったところは、楓くんのお母さんがなくなってしまい、楓くんがお話をしばらくできなくなってしまったけれど、ひかる石をひろって、毎日話しかけていたら、お父さんとお話できるようになったところです。そしてお父さんとお話できるようになった楓くんは、とうとうお友達とも、お話できるようになり、さいごには、おしゃべり上手になりました。私は、そんな楓くんがすごいなと思いました。もし、私が楓くんだったら、楓くんのようにひかる石に毎日話しかけても、悲しみをのりこえて、そんなおしゃべり上手にはなれないと思いますし、お父さんと話すのがせいいっぱいだと思います。

楓くんのように大きな悲しみではないのですが、私も少し悲しい思いをしたことがあります。二年生のとき、学校でいやな言葉を言われて泣いてしまいました。そのとき、まわりにいた友達が応援の言葉をかけてくれました。その言葉が、私の悲しい気持ちをいやしてくれるたすけになりました。楓くんにとってひかる石は、友達になってくれたのだと思います。

私がこの本を読み終えたときに、知ったことや思ったことがあります。知ったことは、石の中にひかる石はたくさんあること。その中でも有名なのが、ほたる石という石だということ。そして、その石にしがいせんというひかりを当てると、緑やむらさきといったきれいなひかりをはなつこと。そして

思ったことは、もし、悲しいことがあったとしても、あきらめないこと。かならずだれかが見守ってくれるから。もう一つは、悲しいことがあったら、おたがいにいやしてあげることが大切だと思いました。

幸せを考えて

弘前大学教育学部附属小学校　對馬朋笑

七月、キャンプに行って星を見た。数えきれないほどの星がまたたいていて、きれいな星々の中には天の川もあった。そこをジョバンニやカムパネルラが銀河鉄道に乗って旅しているのかと思い、わくわくしながらこの本を読んだ。

主人公のジョバンニが、ケンタウル祭の日、銀河鉄道に乗り、親友カムパネルラと旅をする。乗ってきた人たちと話したり、美しい景色を見たりしながら旅をするうちに、この鉄道は、天国に行くのだと気付き始める。そして、「ぼくたちいっしょにいこうね。」と、カムパネルラといつまでも不思議な世界を旅したいと思ったジョバンニだが、カムパネルラとお別れしてしまう。カムパネルラと一緒なら、死んでもいいと思っていたかもしれないのに。まずしくて、家族のために働いて意地悪を言われ、さらに親友まで死んでしまったジョバンニがかわいそうに思えた。けれど、カムパネルラや乗ってきた乗客も、同じくらいかわいそうだと思った。みんな、死んでしまった人たちで、楽しい話の中にも生きていた時の後悔を感じるからだ。死んでしまって、大切な人を悲しませているという思いや、自分も会えないさみしさや苦しさを知ったようだった。

わたしは、死を目の当たりにした経験がない。大好きな家族が死んでしまったことを想像してみたが、悲しくて、どうしていいかわからなくて、泣くしかできないだろうとしか思えなかった。想像するだけでふるえた。だから、読み終えた時に、心のおくでグワーッとうずまいておしよせた、自分でもよくわからないこの気持ちは、何なのだろうと思った。

この物語の作者、宮沢賢治には、トシという妹がいたらしい。トシは早くに死んでしまい、そのころからこの物語を賢治は書いていたのだそうだ。賢治は、ジョバンニを自分、カムパネルラをトシに見立てて、トシとの楽しかった時を思い出して書いていたのではないかと思った。

わたしの心にうずまいたものは、たぶん、想像できないほどの死の悲しさやさみしさの思いだろう。そして、幸せとは

何だろうと考えることが、生きていくことなのではないかという賢治からのメッセージだろう。そばにいてくれた大切な人がいなくなっても、自分らしく生きるすばらしさを、この本で多くの人に知ってもらいたかったのではないかと思った。

人はいつか死ぬ。けれど、その「死」という駅まで、生きることをあきらめずにいたい。自分を見失わず、「人生」という名の長い長い道のりを一歩ずつ、幸せを考えて歩んでいきたいと思う。物語で、同じ大きな大地をふみしめているはずのジョバンニと一緒に。

対象作品／高橋宏幸著『チロヌップのきつね』金の星社

小学校四年の部　第二席

親子のきずな

弘前市立文京小学校　鈴木優衣

〝チロヌップ〟って何だろうと思い、この本を開いてみました。〝チロヌップ〟とは、北の海にうかぶ小さな島のことです。その島にきつねの親子が住んでいて、はじめは幸せにくらしていたのに、きけんがせまり、これから先、親子はどうなるのか気になってこの本を読んでいきました。

この本を読んで、心にのこっていることが二つあります。

一つめは、父ぎつねのことです。島に兵隊がやってきて、母ぎつねと子ぎつねを守るために、父ぎつねが「ケーン」と鳴いて、わざと兵隊の方へ飛び出して行きました。父ぎつねが、自分の命をぎせいにしてまで家族を守って、すごいなあと思いました。

二つめは、母ぎつねのことです。わなにはまって動けない子ぎつねのために、風の日も雨の日もえものをさがし、自分のことよりも、子ぎつねに食べ物のすべてをあたえつづけたことです。さらに、冬がきて、動けない子ぎつねを毛布のようにつつんでずっとあたため続けたことです。母ぎつねもまた、自分よりも子ぎつねが大事だという思いに、心をうたれました。

わたしはこの本を読んで、〝親子のきずな〟について考えました。

わたしの場合、生まれつき耳が聞こえにくく、耳元でさけんでもらって、やっと聞き取れるくらいだったそうです。でも、今では友達がたくさんでき、小学校で毎日楽しくすごしています。

しかし、わたしが小さい時は、父と母はとてもなやんでいたということを聞きました。わたしのためにどうしたらいいか、なやんでなやんで、三才の時に人工内耳の手じゅつをしました。そして、ろう学校のようち部に入りました。毎日母がつきっきりで見守ってくれました。

また、家では今日あったできごとを家族とたくさんお話したり、絵にかいたりしました。字が書けるようになると、毎日絵日記を書きながらお話しました。

その両親のおかげで、わたしは言葉がおくれることなく人と話せるようになりました。おしゃべりが大好きで、「うるさい。」と言われるほどです。もちろん、絵や字をかくのも大好きです。

わたしの父も母も、『チロヌップのきつね』の父と母のように、わたしのために、たくさんなやみ、考え、いいと思ったことはどんどん実行してくれたんだ、わたしのことをとても大事に思ってくれているんだと、しみじみ感じました。

これからは、このきつねの家族のように、父や母や弟を、今よりももっと優しく、そして、大切にしていきたいと思いました。

小学校四年の部　第三席

対象作品／塚本勝巳著『うなぎ一億年の謎を追う』学研教育出版

研究って楽しいな

弘前大学教育学部附属小学校　別宮志郎

ぼくは地球ぎを回しながら、たまごから太平洋の海流に運ばれ成長する、うなぎの幼魚を想ぞうしました。

うなぎは、さけとは反対に海でふかし、川で十年ほどくらし、たまごをうみにまた海に帰ります。そして、さけのように成長の仕組みが分かっていないため、うなぎの完全ようしよくはむずかしいです。実けん室でたまごからうなぎをよ

うしょくすると、ほとんどがオスになってしまいます。試行さくごしてホルモンざいなどをあたえ、たまご、プレレプト、レプト、シラス、クロコ、黄うなぎ、銀うなぎと成長させます。うなぎ研究者のちょ者は、自然界でそれぞれの成長かていのうなぎをつかまえれば、うなぎがどのように海をい動し、成長するかが分かると考えて、広い海でうなぎをさがします。

ぼくは、小学一年生の時からアリの研究とし育を始め、今年で四年目になります。ぼくがし育をしているアリが行う行動「おしりをゆかにたたきつける、ドラミング（ぼくが命名）」があります。ぼくはこの本を読んで、まだ自然界のアリがドラミングを行うのを見ていない事に気付きました。そして、自然界でもアリはドラミングをするかたしかめたくなりました。今までの研究からドラミングをするじょうけんは分かっているので、自然界でも試してみましたが、まだ見れていません。もっとじょうけんを考えてかんさつを続けていきます。

本の中では、レプトのようにあまり苦ろうしないでつかまるものもあれば、プレレプトのようにつかまえるのに十四年もかかったものもありました。プレレプトさがしは、「ゆめの計画」でした。

せん水ていヤーゴをマリアナの海にもぐらせるために、たくさんの人の協力がありました。それでもプレレプトが見つからなかった時、ちょ者はなみだをながしました。本には「人は悲しいとき、うれしいとき、くやしいとき、感動したとき、なみだを流します。この場合、そのどれでもないのに、なぜかなみだがでてきました。」と書いてあります。ぼくは、協力してくれた人への感しゃのなみだだと思いました。

ぼくは、うなぎのことを知りたくてこの本を読みましたが、海の面白い事がたくさん書いてありました。海水塩分のう度が場所によってちがう事、それによって海流が起こる事。生き物は周りのかんきょうにてき応しているため、一つの生き物を研究するという事は、周りのかんきょうも研究する事になります。研究するとたくさんの不思ぎに出会う事ができ、そして、それが研究の面白さだと思いました。地球には、まだまだ不思ぎがたくさんあります。ぼくも、地球がかくしているなぞをかい明したいです。

小学校四年の部　佳作

梨屋アリエ著『ココロ屋つむぎのなやみ』文研出版

すてきなココロになるために

弘前市立大成小学校　水野瑛梨

わたしは、『ココロ屋つむぎのなやみ』という本を読みました。この本をえらんだ理由は、〝ココロ屋〟がどんなところなのか気になったからです。

この本は、やさしくてがまん強い、ちかこのことが苦手な主人公のつむぎが、勝負好きで意地悪なちかこに意地悪をされて、それがきっかけで、つむぎがひろきくんに教えてもらった〝ココロ屋〟でココロを入れかえるお話です。

〝ココロ屋〟は、世界中を旅していて、ココロを入れかえたいと思うと、どこからともなくあらわれ、お店の中にはいろいろなココロがあり、ココロを入れかえられるふしぎなお店です。

わたしがこの本を読んで一番心に残った場面は、つむぎが〝ココロ屋〟の主人のウツロイはかせと会話をするところです。

つむぎはこう言いました。

「苦手な子とも、仲良くできたらいいですよね。その子にいいところがあるのも知っているんです。でもやっぱり、どんなにがんばろうとしても、苦手に思ってしまうんです。」

つむぎは、苦手なちかこに意地悪をされています。それなのに、仲良くできたらいいなと言っていたので、つむぎはとてもやさしいなと思いました。

つむぎは、意地悪なココロやダメなココロ、空っぽなココロと次々に入れかえましたが、結局、ふくざつな自分のココロの方が自然でいいと思い、〝ココロ屋〟でココロを入れかえるのをやめました。

わたしがこの本を読んで分かったことは、入れかえたひとつだけのココロよりも、ふくざつな自分のココロの方がすてきだということです。

わたしのココロは、親切なココロや弱気なココロ、おおざっぱなココロの他に、まだわたしが気づいていない、たくさんのココロがまざってできていると思います。わたしのココロには、強いココロややさしいココロが足りないと思うので、

ふやせるように努力したいと思います。
そして、自分のココロを大切にして、今の自分のココロよりも、もっとすきてなココロになるように、いろいろなことをけいけんして、成長していきたいと思います。

村上しいこ著『みんなのためいき図鑑』童心社

小学校四年の部　佳作

ため息一緒に調べませんか？

弘前大学教育学部附属小学校　鷺坂美采

ためいきとは、どんなものかわかりますか？私(わたし)は、あらためて聞かれたときに自信がなかったので調べてみました。感心した時や、がっかりした時に出る、はぁ～とか、ふぅ～などの、ちょっといつもとはちがう、まとまった息が声に出てしまう感じのものだそうです。〝溜(た)めた息〟と書いて、ため息と書いてある辞典もありました。

主人公のたのちんたちが作ったため息図鑑(かん)によると、ため息には、いやなことや残念なことがため息になるストレス系、うれしさや楽しさがため息になる満足系、ストレス系と似ているけど、自分の力ではどうにもならないモヤモヤ系、安心系があるそうです。

この本を読んで、私も周りの人がいつため息をしているのか調べてみました。お母さんは、私や兄を怒る前にしています。

「はぁ～何回言ったらわかるの？」
「ふぅ～もう、いいかげんにしなよ。」
とか、言っています。

お父さんは、仕事から家に帰ってきて、ビールを飲みながら
「はぁ～～。」
と、長いため息をしていました。今までは、一日のつかれからのため息かなと思っていたけれど、本当は、一日終わりのうれしいため息だったのかもしれないということが、わかりました。

兄は、勉強をしないでお母さんに怒られた後に、
「はぁ、わかっているのに。」

と言いながら、ため息をしていました。これは、ストレス系かモヤモヤ系のため息です。

私はため息をついていない気がしていましたが、つかれてて眠い時で、宿題がおわっていない時についているそうです。ため息は、つかれていたりすると出やすいのかな。

そして、このお話では、チームで図鑑を作る作業をしていました。その作業の中でいろいろ問題が発生して、みんな四苦八苦していました。だけど、主人公のたのちんは、みんなの意見も聞いて、その問題のかこに何が起きたから今があるという原因も探っていたので、すごいなと思いました。自分の力だけでなく、いろいろヒントをもらいながらだけど、最終的には面白いため息図鑑ができたみたいです。

私も、もしチームで何か作る時や、トラブルになりそうな時、スムーズにできない時は、たのちんみたいにまずはみんなの意見を聞いたり、いろいろな情ほうを集めて本当の正しいことを伝えることができるようにするようにしようと思いました。

たのちんたちが作ったため息図鑑の一部ですが、本の最後にのっています。これを読んで、他の人のため息ももっと分析してみたいなと思いました。あなたも一緒にどうですか？

小学校四年の部　佳作　――――――　対象作品／小川晶子著『オタク偉人伝　すごい人ほどぶっとんでいた！』アスコム

読書はゲームだ!!

弘前市立天成小学校　千葉心寿

私は、活字オタクです。字を見ると、読まずにはいられなくなり、体が勝手に字を読んでしまいます。この本は、お母さんが

「これ！みこみたいでおもしろい！」

と言っていたので読んでみました。

この本は、みなさんも知っているあの偉人たちの、子どものころのオタクエピソードをたくさんのせた、ユーモアたくさんの伝記です。

私はこの本を読んで、どうしてこんなことをするの？と思うようなことを、まわりを気にせずやっていることや、学校

を気にせず、先生にしかられても平気でいられることにびっくりしました。また、ふしぎだな？と思ったことをすぐに調べること、一つのことや好きなことに夢中になれることは、とてもすばらしいことなんだなと思いました。

私は、偉人たちの「好き」も、ただの「好き」も、「好き」ということは同じだけれど、偉人たちの「好き」は、これがなければ生きていけない！というくらい本当に好きなんだと思います。この本を読んでいると、その時だけではなく、生活の中でいつも夢中になっていることが伝わります。そして、好きなことについて関心をもち、深めていったから、偉人になったのだと思います。私も、活字を見るとわくわくして、勉強よりも集中して読んでしまいます。どのくらいかというと、歯みがきをかた手に本を読んだり、見ようとしていないのに、牛乳パックなどの原材料名を見てしまったりするほどです。だから、なんとなく偉人たちの気持ちが分かります。私も、しかられるのは苦手だけど、きっと、しかられても活字を読むのはやめられないと思います。でも、私は学校のじゅ業や宿題、先生のことは気になります。

私は、好きなものは好きなまま、のばしていっていいと思います。また、いくら失敗しても、がんばればいつか成功するということ、一つでも夢中になれることをもっているのは、幸せなことだということがわかりました。私は、本を読むと、頭の中にイメージがわいて、続きがわくわくします。続きを想像するのも楽しいです。おかげで、文字を読むのが速くなったり、文章や漢字が得意になったりしました。私にとって、読書はゲームです。しかし、目を近づけすぎて視力が落ち、この夏でメガネデビューをしてしまいました。でも、本を読むのはやめられないので、これからは、三十センチメートル以上はなして読むようにします。大人の小説や伝記など、まだあまり読んだことのない本も読んでみたいです。

小学校四年の部　佳作

『かあちゃん取扱説明書』

弘前市立豊田小学校　今本　琳太朗

対象作品／いとうみく著『かあちゃん取扱説明書』童心社

ぼくが、なぜこの本をえらんだかというと、この本の題名にとてもきょうみを持ったからです。読んでみると、この本の主人公の田村哲哉君は、ぼくと同じ小学四年の男子で、いつもかあちゃんにしかられています。テストの点数が悪かったり、忘れ物が多かったりで、どうしたらしかられなくていいかを考えた結果、かあちゃん取扱説明書を作ることにしたというのが始まりです。

この主人公は、ぼくと重なる所が多いなと思いながら読んでいくと、コーヒーメーカーのトリセツを手本に、かあちゃんのトリセツを作る所が楽しかったです。特に、〝各種機能〟をイラストつきで説明しているのを見て大わらいしました。

そして、〝使用方法〟のきほん編で自分がすることを、おうよう編ではきほん編にプラスすること、ちゅうい点ではしてはいけないことを書いていて、かあちゃんをとてもぶんせきしているなと感心しました。ここのぶぶんは、ぼくがこれから生きていくのに、参こうになる考え方だと思いました。

また、ぼくのお母さんと主人公のかあちゃん、ぼくのお父さんと主人公のとうちゃんは、あんがいにていると思いました。お母さんは「早く。」とよくいうし、「ごはんがおいしかった。」というと、うれしそうにしている所。お父さんは、「男同士。」や「ちゃんとしたモノを作れ。」という所がそっくりです。

さいごに、やっぱり人はほめられると気持ちがよくて、気持ちがいいからやさしくなれるんだと思います。そして、そのやさしさでなかよくなれるような気がしました。

今の世界も、やさしさの前に相手をしっかりぶんせきしてほめあったら、せんそうはないのかなと感じました。

対象作品／ウルフ・スタルク著『おじいちゃんとの最後の旅』徳間書店

大好きなおじいちゃん

弘前市立文京小学校　古川隆惺

ぼくは、スポーツや体を動かすことが大好きで、じっと本を読むことが苦手です。でも、毎年夏休みには一さつ本を読んで読書感想文を書いています。せっかくなのでおもしろい本を読んでみたいと思い、本屋さんへ行きました。ぼくは、おじいちゃんが大好きなので、いっしょに旅に行くことを考えたらワクワクしてきます。早く読んでみたいという気持ちになりました。ぼくは、家に帰ってすぐに本を読みはじめました。

『おじいちゃんとの最後の旅』には、汚い言葉を平気で使うがんこでおこりっぽいおじいちゃんと、そんなおじいちゃんが大好きな孫のウルフが出てきます。入院して病院から出ることができないおじいちゃんとウルフがひみつの計画をします。病院をぬけ出して、おじいちゃんの家に二人で旅をします。このひみつの旅をきっかけに、おじいちゃんがやさしくかわっていくお話です。

この本を読み終えて一番おどろいたところは、ぼくのおじいちゃんと本のおじいちゃんがよくにていたところです。ぼくのおじいちゃんも病気です。体調が良かったり悪かったりします。本のおじいちゃんみたいに口も悪いです。でも、そんなおじいちゃんがぼくは大好きです。だから、この本はとてもおもしろかったです。

この本で気になったところは、ウルフがとてもやさしいところです。おじいちゃんをこっそり家につれていったり、病院で飲めないビールをこっそり買ってあげたりします。ぼくは、おじいちゃんのたん生日には絵をあげたりしますが、もっとなにかしてあげたいと思いました。

また、おじいちゃんがだんだんやさしくなっていくところが気になりました。

最初はかんごしさんに悪口を言ったり、お父さんと仲が悪かったりします。でも、旅をきっかけに辞書でやさしい言葉を勉強をしてどんどんやさしくなります。でも、どんどん弱っていきます。ぼくは、そんなおじいちゃんがかわいそうに

感じました。少しさみしくなりました。
この本を読み終えて、家族を大切にしようという気持ちになりました。おじいちゃんは、亡くなったおばあちゃんに会うために天国に行きたかったので、がんばってやさしくなりました。おじいちゃんは、おばあちゃんがとても大好きなんだと思いました。ぼくも家族のみんなが大好きです。おじいちゃんもおばあちゃんも大好きです。この本を読んで、みんなにいろいろなことをして、よろこんでもらいたいです。

対象作品／金治直美著『マタギに育てられたクマ』佼成出版社

小学校五年の部　第一席

マタギのおきてから学んだこと

弘前市立大成小学校　高山京慧

みなさんは〝クマ〟と聞いて、どんなことを思い浮かべますか？
きっと〝こわい〟、〝きょうぼう〟というイメージがほとんどだと思います。ぼくもこの本を読むまでは、同じことを考えていました。だから、そんな動物を育てているなんて、変な人だなぁ。と思いながら本を読み始めました。
この本の主人公、吉川さんは、〝マタギ〟という昔ながらのおきてを守りながら狩りをする人です。「狩りは命をかけて行うもの」という思いが胸にあるため、え物は必要な分しかとりません。いつも山の神様への感謝を忘れず、めぐみをあたえてくれる山を大切に守り続けています。
ある日、狩りに出かけた吉川さんは、母グマをしとめてしまい、二匹の子グマを育てることになりました。本当は大きくなったら山へもどすつもりでしたが、人間になれすぎてしまったため、クマたちの魂が山の神様のもとへ帰るまで、〝命〟を引き受けることにしたのです。なぜなら、それが〝マタギ〟としての自分の責任だと考えたからです。
ふいにぼくは、春にワラビとりへ行った時のことを思い出しました。そこら中にワラビが生えていて、全部とってやるぞ！と、夢中でとっていたら、いきなりお母さんに、
「こら！小さいものは来年のために残さないとだめでしょう！」

と、おこられたのです。
その時はよく意味が分からなくて、こんなにあるんだからべつにいいじゃないか、としか思わなかったけれど、あの時のお母さんの言葉の意味がやっと理解できました。お母さんはマタギじゃないけれど、山を守るためにはどうすればいいのかをちゃんと知っていて、それをぼくにも教えてくれたのです。
人間は自分たちのくらしを便利にしようと環境破壊をしてきたせに、今ではさかんに環境保護をさけんでいます。ぼくは、人間は自分勝手でわがまますぎる、と思いました。一人一人がお母さんや吉川さんのように、ほんの少し気をつけるだけで、自然を守ることができるのにな、と悲しくなりました。
ゴミを減らす、リサイクルをするなど、環境保護のためにできることはたくさんあります。でも、今ぼくたちに一番必要なのは、マタギのおきてだと思います。なぜなら、みんなが自然に対して感謝の気持ちをもっていれば、環境保護はあたりまえに行われるはずだからです。ぼくは、これから山へ行くときはマタギのおきてを思い出し、自然は人間だけのものではないということを、忘れずに行動しようと思います。人間は自然があってこそ、生きていけるのだから。

小学校五年の部　第二席

対象作品／本田有明著『願いがかなうふしぎな日記』ＰＨＰ研究所

願いをかなえるためには

弘前大学教育学部附属小学校　三上剛史

ぼくは、マンガ本を読むことが好きで、よく読みます。なので、学校の宿題で読書感想文が目に飛びこんできた時、マンガ本の感想文なら楽しく書けるのに、という気持ちになりました。せっかくなので、図書館に行ってみました。すると、『願いがかなうふしぎな日記』という本に出会いました。この本を手にした時、ぼくがもしこんなにいい日記を持っていたら、どんな願いを書いていただろう、という気持ちになりました。

この本には、光平という男の子が出てきます。光平が持っている願いがかなうふしぎな日記は、なくなったおばあちゃんからもらったものでした。光平は、そのふしぎな日記を信用していませんでした。それでも何か書かなくては、おばあちゃんにもうしわけないと思い、一つずつ願いを書きました。すると、その願いがかなっていくのです。ぼくが一番印象に残っているのは、オボレンジャーの場面です。光平は泳ぐことが苦手で、いつもおぼれてばかり。そこでついたあだ名はオボレンジャー。願いがかなうふしぎな日記に、「ぼくは泳げるようになった!!!」と書きました。書いてからも何度も何度も泳ぐ練習をして、失敗もしながら最後には泳げるようになり、日記に書いた願いがかないます。

でもこれは、急に泳げるようになったのではなくて、光平が願いをかなえるために、何度も練習をしていたからできるようになったんだと思いました。

この水泳の話を通して、願いをかなえるためには、目標を立て、書いて、計画を立て、本気で自分の願いをかなえるために、努力していくことが大切ではないかと感じました。書くことで、たとえ失敗をしても、次はどんな風にチャレンジしたら良いか、わかるようになってくるのではないのかと思いました。

ぼくは、バスケットボールの日本代表の選手になるという夢があります。この夢をかなえるためにも、光平のように、目標を立てて、書いて、計画をねって一つずつ努力していく！この方法を取り入れて、夢に向かって進んでいきたいと思いました。

対象作品／福田隆浩著『明日香さんは負けない』講談社

小学校五年の部　第三席

みんなハッピー

弘前市立城西小学校　小林　摩幸

皆さんは、ＳＤＧｓを知っていますか。

ＳＤＧｓを進めると、この世界がよくなっていくと言われ

ています。だから、私はＳＤＧｓが好きです。特に目標10「人と国の不平等をなくそう」が好きです。なので、『明日香さんは負けない』という本を読もうと思いました。

このお話の主人公なみは、いとこの明日香さんに出会っていろいろなことを考えるようになります。明日香さんは車いすに乗っていて、障害のある人がお仕事をするのにちゃんとできるようになるまで、お仕事の内容を教えるジョブコーチをしています。

初めてなみが明日香さんに会った時、明日香さんが車いすに乗っていたので、びっくりしてしまいました。何も言わずに帰ってしまったので、明日香さんにあやまりたくてブルックホールという美術館に行きました。その日は、ルナコ展でした。障害があるルナコさんという人がかいた絵を飾っているのだと、明日香さんから教えてもらいました。明日香さんには、障害がある人が作りだした芸術作品のことを、障害者アートと呼ぶことも教えてもらいました。ここまで読んで私は、障害者アートというものがあると、好きな絵をかいてみんなからほめられてうれしくなり、自分の好きなことができる社会になると思いました。

お昼になったので、明日香さんたちはご飯を食べに行きました。そのお店は障害がある人が働いています。そこでなみは明日香さんから、障害者でもみんな以上に働ける力があること、自分で働いてお金を稼げて自立できるようになると教えてもらいました。私は障害があると働くのは難しいと思っていました。でも、丁寧に教えてもらえばできるようになることがわかりました。みんなが平等に楽しい生活ができるようになればいいなあと思いました。

なみのクラスでドッジボールをする時、車いすに乗っているのあさんに、どんなふうに参加してもらうかを考えていました。だけどなみは、自分たちだけで勝手に決めつけてはいけないと思って、のあさんに聞きに行きました。なみは、明日香さんだったらこうすると思って行動したと思います。なみは、のあさんがどうしたいかを聞くことが、一番大切だと思ったからだと私は思います。でも、私だったら聞きに行かないで考えてしまうと思います。なぜなら、聞きに行くということが思いつかないからです。なので、この本を読んで私も相手のやりたいことを聞きに行ってあげようと思いました。障害がある人でも好きなことができる、みんなが楽しい生活ができるようになる、人の話を聞くことが大切なことがわかりました。

障害があってもなくても、みんなが幸せにくらせるっていいなあと思いました。

小学校五年の部　佳作

対象作品／漆原智良著『かがやけ！虹の架け橋』アリス館

東日本大しん災から学んだこと

弘前市立堀越小学校　白戸咲綾

この本は、わたしが生まれた年に起きた大きな地しん、東日本大しん災の大津波で、子どもをなくした遠藤さん夫ふのお話です。父や母から、「たくさんの人が津波でなくなった」という話を聞いていたので、「3・11大津波で三人の子どもを失った夫ふの物語」という見出しに興味をもちました。つらい内容で、と中で読むのがこわくなってしまうかもしれないと思いながら、実際に体験した人の思いや、命の大切さにふれたいと思いました。そして、悲しい気持ちからどんなふうに前を向いて生きてきたのか知りたいと思いました。

遠藤さんは、つまと三人の子どもの五人家族です。いつの間にか、わたしは自分の家族と重ねながら読み進めていました。遠藤さんが地しんにあったのは、一人で車を運転していた時です。二分以上の地しんが、半日も続いたように感じたほどのおそろしさで心細かったはずなのに、その不安の中で自分のことより家族のことを考え、心配するすがたに気持ちが強くてやさしくてすごいなと思いました。地しんのあと、学校に子どもたちをむかえに行ってみんな無事だったのに、安全だと思っていた家が、大津波に飲み込まれてしまったのを知った時の遠藤さんのつらさが伝わって、心がとてもいたく苦しくなりました。大好きな町、家がぐちゃぐちゃになり、大切な子ども達も失って、「今起きていることが現実なのだろうか？」と感じた遠藤さんのくやしさ、悲しみ、いかり、さびしい気持ち、色々な感情がこの一文ですごく伝わってきて、わたしも重い気持ちになっていました。子ども達を守れなかった自分をせめながら、何のために生きているのかわからないと苦しむ遠藤さんが、他のひ災者の方と寄りそい支え合って、心を一つにして生きることに力を注いでいけるようになった時に、わたしの気持ちも少し軽くなっていきました。遠藤さんが夫ふ二人で生きていくしかないんだ、生きていこうと思えた時に、わたしの気持ちがすっと明るくなった気がしました。

木工所で仕事をしていた遠藤さんに、本だな作りのいらい

が来て、使う人の気持ちを考えながら一生懸命取り組むすがたがかっこよく、今までしずんでいた遠藤さんとは別人に思えました。本だな作りをきっかけに、前を見てしっかり進んでいく遠藤さんが、天国にいる子ども達を思い、虹の絵をかいた遊具「虹の架け橋」を完成させた時に、わたしも幸せを感じました。なくなった人と一緒に生きる幸せはないが、そん在を感じる幸せはあるという考え方がすてきだなと思いました。最後にわたしが心に強く残ったのは、「小さな喜びを多くの人が感じられるようになり、さらにそれがつながっていけば生きる力がわいてくる」という文です。楽しいことばかりではないけれど、こんなんにぶつかった時にこの文を思い出し、命を大切にして成長していきたいと思います。

対象作品／ニック・シャラット著『ねこと王さま』徳間書店

小学校五年の部　佳作

人にやさしくする事の大切さ

弘前市立大成小学校
阿部紘子

わたしは、『ねこと王さま』という本を読みました。この本を選んだのは、この本がわたしの大好きなねこがでてくるからです。

この本は、王さまとねこが主人公の物語です。王さまは、どの仕事も大変上手にできる人です。例えば、赤いじゅうたんの上を歩いたり、重いかんむりを落とさないように、頭にのせていることなどです。でも、お城には十二人のめし使いがいて、他の仕事は全部かれらがやっていました。そんなある日、王さまとかれの一番の友達のねこは、火をふくドラゴンのせいでお城が火事になり、住む所がなくなってしまうのです。

わたしがこの本を読んで、一番心に残ったところは、ねこが、王さまがお城で気持ちよく過ごせるようにたくさんふせんを用意して、それにたのみごとをきれいな字でめし使いに伝えたり、お城が火事になった後、引っこした家でも何もできない王さまのために、身の回りの世話を一生けん命したりしたところです。特に好きだったところは、〝王さまのイス〟を失って悲しんでいる王さまのために、ひじかけイスにキラ

キラしたキャラメルのつつみ紙をくしゃくしゃにして丸め、ペタペタはりつけてかざりつけたところです。それはほう石のようにかがやいて、イスはごうかになりました。わたしはこの部分を読んで、とてもやさしい気持ちになりました。また、何ももんくを言わず、王さまのために働くねこを、とてもすてきだと思いました。なぜなら、もしわたしがねこと同じような立場だったらと考えると、何もできない王さまにはらが立って、もんくを言っていただろうと思うからです。

お城を焼け出されてから、住む家をさがしたり、家具をそろえたり、めしつかいが一人もいなくなっても、ねこは王さまをみすてず、はげまして元気づけて、ずっとそばにいて世話をしつづけました。それまで一度も感謝の言葉を言わなかった王さまがねこにむかっていいました。

「たいせつなともよ、きみがいてくれなかったら、わたしは、どうなっていただろう。きみほどすばらしいともだちは、どこをさがしてもいないにちがいない。きみがいなかったら、わたしは、どうしたらいいかまったくわからなかった。本当にありがとう」と。

この言葉で、ねこもわたしも幸せな気持ちになりました。

わたしはこの本から、周りの人々がこまっていたら、不満を言わず親切にすることを学びました。これから、両親や友達にもっとやさしくしたり、いつかは、こまっている人達のためにボランティア活動をしてみたいと思っています。

小学校五年の部　佳作

対象作品／斉藤洋著『しろくまだって（斉藤洋のしろくまシリーズ）』小峰書店

ぼくだってマルクのように

弘前大学教育学部附属小学校　成田　歩生

ぼくは、『しろくまだって』という本を読みました。この本を選んだ理由は、題名が「しろくまだって○○したい」と、ぼくたちに何かを伝えているかのように感じたからです。

このお話は、人間の言葉をしゃべれるしろくまの兄弟が主人公の物語です。弟のカールは人間のことをよく知っていて、兄さんのマルクはプロレスが好きです。そして、このしろく

まの兄弟は、電気を求めて街にある運送屋で「しろくまのぬいぐるみを着た人間」として働く体験をします。

ぼくは、この本を読んで一番心に残ったところがあります。それは、マルクがプロレスの試合を見に行った時に、反則をよくするマッキークロコダイルという選手が、相手選手を砂(すな)がつまったビンでなぐり、気を失わせましたが、レフェリーは見ていなくて、反則にしませんでした。すると、マルクがリングに立ち、ビンでなぐられた選手を助けたところです。ぼくは、マルクが勝手にリングに上がったので、マッキークロコダイルかレフェリーにひ判されるかもしれないのをかくごして、正しい行動をとったのがすごいと思いました。もし、ぼくがマルクと同じ立場だったら、なぐられた選手を助けたい気持ちはあるけれど、ひ判されるかもしれないという気持ちの方が強く、見ているだけで行動することができないと思います。

一か月ほど前に、宿泊学習で野外すい事がありました。ぼくは、家で練習していたので、野菜の切り方はある程度わかっていましたが、他の班(はん)の人がとまどっている様子だったので、教えてあげようかなあと思いました。しかし、もしかしたら自分が教えようとしていることがまちがっているのかもしれないと自信がなくなり、ぼくが知っていることの、ほんの少ししか教えることができなかったという出来事がありました。

これからは、マルクの勇気ある行動を見習って、自分が正しいと思ったことは自信をもって行動していきたいと思います。ぼくが自信をもって行動することが、もしかしたら、友達を助けることにつがなっていくのかもしれないなあとも思いました。

対象作品／齋藤孝著『こども「学問のすすめ」』筑摩書房

どうして勉強するんだろう

弘前市立東小学校　佐々木　貴　人

八月に入っておぼんが過ぎ、夏休みも終わりが近くなってきた。ぼくは、「どうして、毎日学校に行って、勉強しなくちゃいけないんだろう。」と思って、少しいらいらしていた。そんなぼくを見て、お母さんが、

「この本、読んでみて。」

と、『こども「学問のすすめ」』という本をわたしてきた。ぼくは、どんな本なんだろうと思って、読んでみることにした。

『学問のすすめ』は、福沢諭吉という人が書いた本だ。一万円札にのっている人だから、ぼくでも顔は知っている。読み進めると、ぼくの探していた答えがすぐに見つかった。

「賢人と愚人との別は、学ぶと学ばざるとによりて出来るものなり」

どういうことかというと、人は生まれたときは何も差はない。でも、大人になるにしたがって、びんぼうな人、豊かな人、尊敬される人、軽く見られる人、地位の高い人、地位の低い人に分かれてしまう。その差は、勉強するか、しないかで決まってくる。勉強した人は、人よりたくさん知識があるので、大事な仕事や難しい仕事を任される。世の中から必要とされるから、みんなに尊敬され、地位も上がり、お金もたくさんもらえる。それに比べ、勉強しない人は、簡単な仕事にしかつくことができないし、あまり給料ももらえない。そして、尊敬もされにくい。

ぼくは、今のまま大人になったぼくを想像してみた。いやいや仕事をしている自分。買いたい物も買えない自分。人をうらやましがっている自分……。ぞっとした。

そして、諭吉先生はこうも書いている。日本が発展していくためには、みんなが勉強して、知識を身につけ、大事な仕事について世の中の役に立つことが必要なのだ、と。ぼくは、自分自身のためだけではなく、世の中のためになるには、勉強が必要なんだと思った。

「独立の気力なき者は、国を思ふこと深切ならず」

これは、独立心をもつ人だけが日本という国を支えられる

という意味だ。独立心とは、人を頼らない心のこと。家族に頼りすぎている自分が見えてきた。勉強のこと、陸上のこと、習い事のことなど、日常のちょっとしたことでもよく考えないで、すぐにどうすればいいかを家族に聞いていた。これからは、何が一番大切かをしっかり考えよう。物事のよい悪いを自分でちゃんと判断しよう。そうすれば、自分がどうしたいのか、何のためにしているのかが分かるはずだ。

ぼくは、日本に生まれたことが当たり前で、何のために勉強するのかを考えたこともなかった。この本を読み終えて、社会にこうけんできる人になりたいと思った。学校の勉強を大切にしよう。勉強の好ききらいをなくして、自分の力で考えられる強い頭をつくろう。ぼくは、学校が始まるのが待ち遠しくなった。

対象作品／宗田理著『ぼくらの太平洋戦争』ＫＡＤＯＫＡＷＡ

小学校六年の部　第二席

『ぼくらの太平洋戦争』を読んで

弘前市立福村小学校
山田絵琳

私は自由があたり前だと思っていました。一学期の社会の授業で、憲法は国民主権、基本的人権の尊重、平和主義の三原則で成り立っていることを学習しました。いつも私は教室で男女一緒に勉強して、男女関係なく遊ぶ仲間がいて、自由にのびのびと暮らしています。だから、三原則がなくても自由があたり前だと思っていました。

でも、『ぼくらの太平洋戦争』を読んで、あたり前にあるはずの自由が、太平洋戦争中は全くなかったことを知りました。子供たちは勉強もできずに兵器をつくらされ、男女で遊ぶことも、話すことさえもできませんでした。国民の自由と平和を、戦争や国がうばっていたことに衝撃を受けました。

現代から戦時中にタイムスリップした英治たち男女七人も、本当に驚いたと思います。それでも、男子と女子の会話を禁止されていながらも、工夫して励まし合う勇気と行動力、そして、「非国民」と罰を受けるリスクがありながらも、「死ぬなよ！」と声を掛け合い当時の人達を仲間にして生きていく

力強さに、私はハラハラしながらも、憧れで胸がいっぱいになりました。私一人だったら、逆らうなんて怖くてできないけれど、英治たちと一緒なら、私も勇気を出せるような気がしました。明日、自分自身や仲間が死んでしまうかもしれない状況の中で、仲間がいたからこそ強く生き抜いていけたのだろうと思います。戦争が終わったら、人の目を気にする事なく、皆で自由に遊んだり、おしゃべりしたいと願ったのではないでしょうか。

戦後にできた憲法の三原則の本当の意味を、初めて理解できたような気持ちになりました。もっと戦争のことを深く知りたくなりました。当時の人達が、どのような思いで必死に生きてきたのか一人一人に目を向けて、なぜ戦争をしてはいけないのか、じっくり考えなければいけないと思いました。

私は、世界中の人々と戦争の話や憲法の三原則への思いを共有して、英治たちのように仲間を少しずつ増やしていきたいです。そして、世界中が互いに支える仲間になれたら、戦争はなくなると思います。どの国も一人一人が自由で、平和があたり前の優しさにあふれた世界になる事を、心から願っています。

対象作品／神戸遥真著『ぼくのまつり縫い』偕成社

小学校六年の部　第三席

自分の「すき」には正直に

弘前市立福村小学校　成田航陵

男女の集まりの中で、少数派の人たちは○○男子や○○女子と言われています。手芸をするのは女性の方が多いので、手芸男子と言われるのかもしれません。僕は、『ぼくのまつり縫い』という本のサブタイトルの「手芸男子は好きっていえない」に共感しました。好きなことに正直になれない気持ちや、男子で手芸が好きというのが僕と似ていたので読んでみようと思いました。

友達に誘われてサッカー部に入った主人公の針宮君は、手芸好きであることを隠しています。けれども、手芸部に助っ人として参加して、手芸部員と関わるうちに、サッカー部か

ら手芸部に転部する決意をします。このお話は、針宮君が自分の好きなことに正直になっていくお話です。

特に気に入った登場人物は二人います。一人は、針宮君がよく行く手芸屋さんの、モモちゃんという店員です。勢いで「手芸なんか興味ない」と言ってしまって落ち込んでいた針宮君のことを、モモちゃんはお茶に誘ってくれました。その時の発言で、モモちゃんが男性だということがわかりました。モモちゃんは男性だけど、スカートをはき、つけまつげをつけ、黒い口紅をぬっています。自分が好きなことを隠さずに、楽しんで生きています。僕はモモちゃんの、他人に変なことを言われても気にしていないことと、みんなに自分を認めてもらうなんて無理だと分かっていて、それでも自分の好きな事に自信を持ってやっていることが、とてもかっこいいと思いました。

もう一人は、針宮君をサッカー部に誘ってくれた友達であるカイトです。カイトにからかわれたくなくて、針宮君は手芸好きなことをずっと黙っていました。モモちゃんにアドバイスを貰った針宮君は、手芸好きなことを伝えました。その時、カイトはすごく怒りましたが、怒った理由は針宮君が何もたよってくれなかったからです。自分のせいで針宮君に辛い思いをさせていたと怒っていて、僕はなんて友達思いのいいやつなんだ、と感動しました。

実は、僕も小学校で手作りクラブに入っています。ミシンで縫うのも、羊毛フェルトでマスコットを作るのも楽しいです。針宮君と同じようにピンク色も好きです。けれど、僕にも少しはずかしいなぁと隠したくなる時期がありました。でも、今ははずかしくありません。僕は僕が好きなものを大事にしているだけなので、たとえからかわれても気にしません。針宮君も同じように好きなことに自信を持ってくれました。僕は、もし自分の好きなことに自信が持てない人がいたら、自信を持てるようにその人のことを助けてあげたいです。

小学校六年の部　佳作

対象作品／芥川龍之介著『鼻』集英社

自分を好きになるために

弘前大学教育学部附属小学校　吉田蒼汰

「ぼくと似ている。」自分と重なると、痛いほど気持ちが分かる。この本は、あごまである長い鼻を気にしている禅智内供の話だ。

ぼくも内供と同じように、見た目で気にしていることがある。しかも、悩んでいることも知られたくないという面どうくさい性格もぼくと同じだ。「日常の談話の中に、鼻という語が出てくるのを何よりも惧れていた。」とある。すごく分かる。ぼくも学校で、自分の気にしている話題が出てくると息をひそめている。そんな時は、心の中はもやもやとした気持ちでいっぱいになる。だから、鼻が短くなった内供の姿は一度はホッとした。それなのに、鼻が短くなった内供は、また笑われてしまう。ぼくは悲しくなった。町の人は仏に仕える人なのに、鼻のことなんか気にしてかっこ悪いとばかにしていたのだと感じた。その気持ちを内供は「もう一度その人を、同じ不幸に陥れてみたいような気にさえなる人間の一面」と言った。ぼくは、こんなこと思う人いるのと思ったけれど、ぼくにも弟がしかられている時の少しの優えつ感のような、そんないじわる心がある。でも、それはほんの少しのいじわる心だ。町の人達も、ちょっとのいじわる心で内供を笑ったのだと思う。けれど、それがたくさん積み重なり、内供は経文を読めなくなり、徳の低い怒りっぽい人間になってしまった。ぼくは、鼻が長い時よりも、短くなってからの笑いの方がつらいのではないかと思った。外面をばかにされるよりも、内面をばかにされるほうが、他人に自分の価値がないと言われているようで傷つく。内供に、「鼻が長くても別に良いじゃん」と寄りそってあげる人がいれば、内供はつらい思いをしなかったのだろうか。自分だったらそう内供に声をかけたくなる。でも、自分も気にしていることを「別に良いじゃん」と言われても、たぶん解消できないと思う。でも、内供は自分で乗りこえた。きっと内供は、自分は自分とありのままを受け入れられたのだろう。その明るい風景が、「庭は黄金を敷いたように明るい」「まだうすい朝日に、九輪が

まばゆく光っている」と書かれていた。明るい朝が、仏様のように輝いていて、ぼくは内供が人の目を気にする心をのりこえて晴れ晴れとした気持ちになれてよかったと思った。鼻が長かった時は、鼻しか見れていなかったからよけいきれいに見えたのだと思う。

もう内供は、鼻をばかにされても気にしないだろう。つらい気持ちがあったからこそ、今までより人に寄りそってあげられるだろう。他の人からの視線は、時に自尊心を傷つけられることもある。ぼくはまだ周りにふり回されてしまう。でも、ぼくはそのままのぼくだと受け止めれば、こわがらなくてすむと思う。自分の価値は自分で決めて、自信をもってむかえる朝は、きっと今より明るいはずだ。

小学校六年の部　佳作　――――――――　対象作品／K・L・ゴーイング著『ぼくの弱虫をなおすには』徳間書店

こわいものがありすぎて…

弘前市立北小学校　髙橋遼馬

「こわいものリスト」をぼくが作ったら、紙がうまっちゃう程すごい数になると思う。暗い部屋や虫、大きい音や高い所がまずリストに入る。小学校生活を続けているうちにぼくのこわいもの、苦手なものはどんどん増えていった。そしてそのこわいもの、苦手なものを克服していこうとは、『ぼくの弱虫をなおすには』を読むまで考えたこともなかった。

主人公のゲイブリエルの気持ちはすごくよくわかった。もし、ぼくと同じ学校にいたら一緒に「だってこわいし、嫌だよね。」と言っていたと思う。きっとなぐさめ合っていたかもしれない。

ぼくの「こわいものリスト」でかなり上位にくるのが、防具をつけてやる薙刀の打ち合いだ。ぼくは小学校四年生から薙刀をやっている。はじめは学校のクラブ活動からやった。防具はつけないで基本の振り方や構え方、打ち返しを教えてもらって練習した。薙刀をやっている時は、いつものぼくとはちがって大きなかけ声を出せた。けいこ着とはかまをつけた時は、背すじがのびて自分が強くなったように思えて、どんどん薙刀に夢中になった。

しかし、学年が上がると防具をつけて練習することが増えた。防具をつけてする練習は、今まで自由に動くことができていたのに、急に動きづらくなった。一番つらかったのが、めがねをはずして面をつけることだ。視野がせまいしぼんやりしてよく見えない。マスクをして面をつけると、少し動くだけで息が苦しくなる。面の上から打たれるととても痛い。ぼくは大会とか出たくないし、強くなりたいと思っていなかったので、薙刀がどんどん苦手になった。ゲイブリエルの「ぜったいに五年生にはならない」という気持ちが、痛い程よくわかった。

薙刀をやめようと考えていたころ、お城の特集番組をみた。そういえば薙刀って男の人たちが戦で留守の間、城を守るために女の人たちが使っていたんだよなと思い出した。きっとこわかったよなと思った。「自分の子どもや大事な人を守るために薙刀で立ち向かっていったんだろうね。」というお母さんの言葉に、ぼくはショックを受けた。強い人だけが薙刀を手にしていたんじゃないと気づいた。守るための薙刀もあるんだと思ったら考えが変わってきた。薙刀を教えてくれる先生が、「薙刀は武道です」と言っていた意味が少しわかった。技だけじゃなく、心もきたえないとダメなんだ。

ゲイブリエルが「愛してくれる人がいれば何もこわくない」と思えたように、大事な人を守るためならこわくないと思えた。それがぼくの探していた鍵(かぎ)だった。今までと違う気持ちで薙刀を続けてみようとぼくは思った。すぐにぼくの弱虫はなおらない。でも、少しずつ変わっていきたいと思えたのはゲイブリエルのおかげだ。

小学校六年の部　佳作　――――　対象作品／マイク・トムソン著『戦場の秘密図書館～シリアに残された希望～』文溪堂

希望の力

弘前大学教育学部附属小学校　花田　慎之助

ぼくがこの本を読んだきっかけは、『戦場の秘密図書館～シリアに残された希望～』という題名がとても気になったからです。戦争の中でどのような希望があるのかとても知りたくなりました。

国の大統領が、なぜ自国の民に残ぎゃくな行為をしたのか。どうして同じ人間を殺してしまうのか。他に何か方法がなかったのだろうかと残念でなりません。

もしぼくがこの地にいたら、秘密図書館には行かなかったと思います。危険な目に遭うかもしれないので、こわくて行動できないと思います。しかし危険をかえりみず、秘密図書館に行く人々はいました。電気、水道の供給もたたれ、食べ物等が不足する中でも人々は未来への希望を求めていたのです。戦争で大切な人と別れてしまった人達の安らぎの場所であっただろうと思います。

今、ぼくは平和になった日本に住んでいます。ごはんも食べられるし、学校にも行けるし読書もできます。しかし、ぼくたちの日常があたりまえのことではないのだとあらためて気づかされました。

最近おそろしい動画を見ました。ミサイルによってぎせいになった町や人々。子供たちもその中にいました。同じ世界のできごとなのに、あまりにしょうげきてきでした。戦争は本当におそろしいです。そのような状きょう下でも図書館をつくった人々は、どのような気持ちでいたのだろうか。ぼくはこの図書館をつくった人たちの信念の強さを感じました。平和への希望があったからできたと思います。希望を持ち続けたからこそ立派な秘密図書館をつくれたし、希望への力は絶大なものだと思います。今もなお、世界では戦いがおきています。一日でも早く平和がおとずれるように心から願います。

中学校

一年 二年 三年の部

対象作品／小林快次著『ぼくは恐竜探険家！』講談社

やっぱり何でも勉強につながる

弘前大学教育学部附属中学校　鷺坂祐将

もうこの世にはいないが、ぼくの尊敬している祖父が昔、本屋で一緒に買ってくれたＤＶＤ付きの恐竜図鑑を見た時から、ぼくは一時期恐竜にあこがれていた。その大きさや、強さはもちろん、その種類により特技がそれぞれ違うのだ。もちろん、現在は存在していないのだが、二億年弱も繁栄していたことに感動した。その頃、博物館とかに連れて行ってもらって、その姿でさらに感動したことをこの本を読んでいくうちに思い出した。

ただ、この本は恐竜学者の小林さんが、どのようにして恐竜学者になったかということも書いてある。題名は『ぼくは恐竜探険家！』という。この本を読んでいくうちに恐竜のことよりも、どのようにしたら恐竜学者になれるのか？いや、ぼくにとってはまだ、将来になりたいものを決めていないため、どのようにしたら将来につながっていくのかということを改めて考えさせられた。

恐竜学者になりたいと思ったとき、何を勉強すればいいのか、という質問に対して小林さんは、なりたいのならどの教科も楽しんでやれとアドバイスしている。ぼくは、色々なことに興味はあるけれど、勉強が楽しいと思ったことはない。なぜ、楽しいという感覚が生まれるのかがわからない。なぜ、楽しいと思えないのか考えた。それはつまり点数が取れないからではないかと思う。だからやる気をなくすし、点が低いからダルいとしか思えないし、ダルいといえば、母に怒られる。だからしっかり勉強しろと言われても、面白くないのだから勉強に身が入るわけがない。

しかし、ぼくには好奇心だけは人一倍あると思う。それに体力もあると思うので、何かしらはできると思うのだが、そのためにも勉強が大事だと言われると辛い。

恐竜を発掘する、そして研究をすると一言でいっても、多くのことを勉強しないとならないようだ。ただ、掘ればいいだけではない。現地の人ともコミュニケーションをとらないといけないし、その場所の危険な生物について、環境につい

ても学ばなければならないし、盗掘されないように工夫もしなければならないし、地層についても勉強しなければならない。先に成し遂げた人の後をやっていてもだめなので、本当に努力や勉強が必要らしい。そして、発掘した後も、クリーニングという骨をきれいにすることや、年代や当時の環境を分析することも大切なのだ。

本当に、人生は勉強だらけらしい。いつになったら勉強しなくてよくなるのかなと思う。けれど、勉強は一生ものだと、そういえば祖父が言っていたなと思い出した。大きくなって、自分の好きな仕事についていたら、勉強は楽しいぞ、とも言っていたな。

恐竜学者の小林さんは、英語力を効率的にマスターするために、単語と読みと会話を徹底したとある。一日十個の単語を覚えたり、英語の小説を辞書を使わずに読んだり、ニュースやドラマを復唱するということをしたそうだ。そういえば、ぼくも母によく言われる。英語は声に出して書けと。書かないと覚えられないらしいが、だけど、こんなにもつまらないこと、ぼく自身はできていない。やる前からダルいとあきらめている。しかしその結果が、点に結びつかない。

どうやったら勉強が楽しくなるかな。テストの点数取れるかな。テストの点数を取るだけでいいのかな。

最後にもう一度考えた。祖父は勉強が本当に好きだったのかな？祖父は生涯、大学の先生だった。専門分野はもちろん、他の事もいろいろ興味を持ってやっていた。ぼくは祖父似らしい。さらに、人一倍いろいろなことに興味はあるから、遊びも部活も、そして勉強でも今は我慢して続けてさえいれば、もしかしたら、今後はどこかでやる気があがり、今より勉強が楽しくなるかもしれないと、そう思った。そのことを楽しみに今まで以上に、まずは興味があることに突き進めるように努力しようと思った。

対象作品／ウィリアム・J・ベネット著『魔法の糸』実務教育出版

自ら気付く幸せ

弘前市立第三中学校　小堀和華

「どれか好きな本を一冊あげます。」

小学校卒業の時、担任の先生が自分の本を沢山教室の机に並べ、クラスみんなにくれました。じゃんけんで勝った人から選べる事になり、自分が一番最初にもらう事ができました。どれも見た事がない本ばかりで選ぶのに迷いましたが、この本だけは、まるで自分の事を呼んでいるかのように感じ、手に取りました。先生はいつも私達に厳しく、つらかった思い出しかありません。でも、先生も読みきっていないという分厚い本を選んだ私に、快く差し出してくれました。

「それ読んでくれるの？」

と、少しうれしそうにも感じました。

まるで辞書のような厚さの本、本を読むのが苦手な私ですが、とても心ひかれました。まほうの糸、本の表紙がカラフルなので、虹色のような糸が出てくる楽しいお話が書かれているのかなと想像しました。題名の横に「こころが豊かになる」と書いてあります。生きていくのに何かヒントになるかもしれないと思いました。

読み始めると、それは主にアメリカの昔から伝わる短い物語を集めた本でした。各々読んでいて直接的な文というよりも、読んだ受け手が考える、考えさせられるというようなものです。

私が今取り組んでいる様々な事も、「やりたくないな、これ意味あるのかな」といやに思う事もあります。主人公のように時間を早く過ぎさせられるまほうの糸があったら、と思う事もあります。共感できるので、どんどん読み進める事ができました。

今の生活に不満を感じている主人公。理想が叶っても、結果また新しい不満がうまれて、失って初めて元々の幸せを感じ、今まで通りが良かったと思っていました。

この本は、私達が中々経験できないから常にずっと望む理想を、物語を通して教えてくれました。例えいやな事があっても、良い事も悪い事も全部思い出になり、つらい事をがん

ばって乗りこえたからこそ楽しい事もあると思わされました。いやな事からにげるのではなく、まずがんばってみようと決めました。

お金が大好きな自分と重ね合わせやすい主人公が出てきました。その主人公は黄金が大好きで、大事なむすめを放っておいてまで黄金、黄金、誰よりも持っていても、より多くの黄金を求めていました。黄金が一番大事だと思って、他の物を全部失って、本当に黄金だけになったら、その主人公は失望しか残りませんでした。私の親も、お金は大事だけどかせぐ過程が大事だと言っていました。少しつながるものがあるのかなと考えました。

この本の中の物語は、教え方として間違った考えを抱いている人に、直接頭ごなしにおこったり否定するのではなく、一度相手の望みを聞き入れてから自分に気付かせるというものでした。

不思議な事に、一度目に読んだ時と二度目に読んだ時は印象が違う所がありました。一度目読んで母に説明した時は、本当に書かれている先も伝えていて、自分の頭の中ではもっと文章があったはずなのに、二度目読み直すと、その文はありませんでした。それは読んでから母に伝えるまでに、自分なりに解しゃくして、作りあげていた文章なのかと思いました。

読み進めるに従って、この本をくれた先生の事を思い出しました。きっと先生も、私達への教育の仕方を手探りで、どうより良いものにしていくかを考えてこの本を手に取ったのではないかと思います。厳しくおこっていたのも私達への愛だったのだと感じました。素直な良い行いというものを教えてくれていたのだと思います。

今の生活、人生の素晴らしさ、沢山の事を考えさせてくれた本でした。きっと私が成長して、時が経ってから読むとまた違う印象や気付きがあると思うので、この本をずっと大事にしていきたいと思います。

対象作品／如月かずさ著『給食アンサンブル』光村図書出版

自分を大切にすること

弘前大学教育学部附属中学校
中井　結衣子

私は、幼稚園に通っていたころから給食が大好きだった。そのため、題名に「給食」という言葉が入っているこの本に興味を持った。しかし、題名をしっかりと見ていくうちに、頭の中は「アンサンブルってなんだろう。」という疑問でいっぱいになった。私は「アンサンブル」という言葉を知らなかったのだ。気になって辞書で調べると「少人数の合そう・合唱。または、合そう団・合唱団」と書いていた。「給食の合そう・合唱。給食の合そう団って何だろう。おもしろそうだな。」と思い、読み進めた。

この本は小さな七つの物語からなっている。その中で、「マーボー豆腐」という物語に一番心を動かされた。

主人公は中学一年生の女子、桃だ。桃と私は共通点が多い。辛い物が苦手、おなかが弱くてすぐ痛くなるなどだ。そして、好きなことをかくしていたという部分も同じだ。

私は五年生のころまでピンク色が大好きだった。ある日、友達に好きな色を聞かれ、「ピンク色。」と答えた。すると友達に、「子供っぽいね。」と笑われ、とても傷ついたことがある。それ以来、私は好きなことをあまり人に言わないようになった。

桃の場合は小学生のころ、よく童話の話をしていた友達に、ひさしぶりに童話の話をしたら、「そんな子供っぽいもの、もう読むわけないだろ。」と言われ傷ついていた。

私の場合は、悲しくて悔しくて、ピンクだった筆箱や、文ぼう具の色を大人っぽい白や黒に変えて、ピンクを無理やり嫌いになろうとした。

桃も最初は、友達や家族に「子供っぽい。」と言われたことが悲しくて、本当は好きな童話ではなく、大人向けの小説を選んで読んだり、大人っぽい友達の真似を一生懸命したりした。そんな桃は、周りから見たら不機嫌そうにしか見えなかったそうだ。あの時の、ピンクをがまんしていた自分は、周りの目にどう映っていたのだろう。

「そんなに無理して大人になろうとしなくたっていいと思う

けど。そういうのってきっと、自然と変わっていくものだから、桃はただ桃らしくいればいいんじゃない？少なくとも私は、無理に大人っぽくしてる桃より、普段の桃のほうがずっと好きよ。」

友達の美貴ちゃんが言った。

「普段はおどおどしてるのに、好きな本の話をするときはすごいおしゃべりなとこ、昔と変わらないな。」

友達のみっくんが言った。桃は、ずっと不安で重たかった胸が、彼らの言葉で軽くなっていった。

友達の言葉の影響力ってすごいな。ちょっとした一言で、とことん落ち込んでしまったり。ちょっとした一言で、どん底から救われたり。本当は、自分というものを強く持ち続けることが大切なのだろうが、なかなか難しい。ピンクが大好きな自分をごまかし、一生懸命背のびしていた五年生のころの自分。大人っぽい文ぼう具を持って勉強ははかどっていた？大人っぽい洋服を着て、自分に似合っているなと思っていた？そのころの自分と会えたならば、「五年生でピンクが好き？結こう結こう！」と抱きしめてあげたい。

みなさんはもうお気付きだろう。この物語に「給食」はメインとして出てこない。がっかりした人もいるかもしれない。けれどもその代わり、自分を大切にしようという極上のごちそうが味わえる。ちょっぴりつらかったスパイスも効いているが、みなさんの心におなかいっぱいの満足感を与えることだろう。

桃の物語から、自分らしく生きることは、自分を大切にすることだと気がついた。自分は今でも相変わらず、周りの言葉に一喜一憂して、自信を失いがちだ。桃のようなすてきな笑顔でいるために、自分にエールを送りたい。今日の自分、がんばれ。

中学校一年の部　佳作

見る

対象作品／岩合光昭著『生きもののおきて』筑摩書房

弘前大学教育学部附属中学校　大瀧実結

私には、悪いくせがあります。それは、人やものを見た目で判断してしまうということです。数えきれないほどあるので、自分でもどうすればいいかなやんでいた時に、この本と出会いました。『生きもののおきて』と書いてあったので、悪いくせがまた出てしまい、タイトルを見て世界の動物たちの生き方が書かれてあると思っていました。この本のページをめくる前までは。

この本の著者である岩合さんは、もともと猫の写真家です。そんな写真家である岩合さんは、今から約三十八年ほど前にアフリカの国立公園に滞在しました。アフリカはライオンやゾウ、キリンなどといった動物の代名詞のような生き物のほか、ヌー、ハイエナ、バブーンやヒョウ、チーター。さらにリカオン、鰐。地球で最も哺乳類が多く生息する大陸です。私はこの時点で一つ疑問を抱きました。それは、アフリカの哺乳類にしぼる意味です。数多くの哺乳類が生息するこの世界では、日本で見ることの出来ない哺乳類ばかりだと思います。けれど、私だったらもっと珍しい動物に興味があります。例えば、日本の絶滅危惧種であるラッコやインドネシア、マレーシアに属するボルネオ島の固有種であるテングザルなどを身近で目の前で見てみたいと思います。けれどこのことから、岩合さんは写真家としてアフリカ以外の概念を捨て、あらかじめ想定した通りの場面を撮影するのではなく、野生動物との距離を時間をかけて少しずつ縮め、自分の理想や想像をうわまわったすばらしい写真を作りあげるため、選んだのだと思うことができました。

この後の内容などからは、私の心に強く突き刺さるようなものばかりでした。アフリカにいるのは動物たちですから、もちろん食物連鎖の食べる・食べられるが写真の中に……。その姿をみてしまうと、「かわいそう」や、「うわっ」という言葉が脳内を走ってしまいました。でも、それは人間が牛肉や魚を食べているのと同じように、アフリカにいる哺乳類たちも自分たちより弱いものを食べて暮らす、そうやって動物

たちみな生きていくのだと考えると、私は胸が少し痛くなりました。

さらに私は、著者自身が伝えようとしている「人間による勝手な解釈」いわゆる人は勝手な解釈をして、動物たちを見てしまう。このことについては深く考えさせられました。人間にとって、物事をシンプルに捉えるというのは、もちろん個人差はありますが、私は漢字百個を一瞬でおぼえるのと同じくらい難しいと思っています。年を重ねて知恵や経験がまとわりつくと、より一層難しくなると思います。今までやってきたことや考えてきたことを変えるというのは、よほど覚悟が必要だと思います。

私は、『生きもののおきて』を通して、人や物事や自然界についての考え方が変わりました。自分が知っていること、分かっていることなんて限られているのに、それに固執して先入観をもって、「見る」ことにこだわっていました。しかし、もっと大きな目、世界や宇宙を「見る」ような視点もあることに気付き、たくさんのことを「見よう」と思うようになりました。

中学校一年の部　佳作　――――　対象作品／鴻上尚史著『孤独と不安のレッスン　よりよい人生を送るために』大和書房

『孤独と不安のレッスン』

弘前大学教育学部附属中学校　鈴木春汰

僕は運動が好きです。スポーツをやっていて、大会にもよく出ます。その時に、「自分は勝てるかな」「一回戦で負けたらどうしよう」など、心の中で不安が積もってしまいます。そして試合中負けていると、一人でベンチに座り、どうしてアドバイスしてくれる人（ベンチコーチ）が個人戦ではいないのだろうと、考えても仕方ないことばかりを考えてしまいます。なので試合中、「孤独は辛い」と、この本を読むまではずっと思っていました。

この本では、「本当の孤独」と「ニセモノの孤独」、「前向きの不安」と「後ろ向きの不安」という二種類の孤独と不安について説明があります。

この本を読む前の僕は、「ニセモノの孤独」と「後ろ向き

の不安」ばかりでした。ですが、この本を読んだ後は、孤独と向き合うこと、「本当の孤独」とは何か、「後ろ向きの不安」から、「前向きの不安」に切り替えられるようになったのです。僕はテニスの試合中に、「後ろ向きの不安」に飲み込まれ、自分のパフォーマンスを発揮することができませんでした。しかし今は、試合中、気持ちよくプレーをすることができるようになってきました。

「ニセモノの孤独」とは、例えば読書をしていて、読み終わったらすぐに友達に電話をかける、というように、人とのつながりをすぐに求めたがったり、孤独が辛いと少しでも感じてしまったりすることだそうです。僕も、アドバイスをしてくれるコーチが、試合中なぜベンチにいないのかと孤独になったことがあります。これも「ニセモノの孤独」にあたります。

それに対して「本当の孤独」とは、自分と深い対話をすることだそうです。例えば、一人で海外旅行に行くと、友達や恋人からの自分への刺激はなく、相手を気遣わずに無意識に自分のことを深く考えてしまうのです。それで自分の世界に入ってしまうことを「本当の孤独」というのだそうです。他にも「本当の孤独」は、「一人でいるのが恥ずかしい」、「一人でいるのは惨め」などと思わずに、一人という環境をリラックスして過ごせる時のことも言うそうです。

孤独は辛いものだと思っていたけれど、本当の孤独は辛くないものだと考えが変わりました。一人でいる人を「ぼっち」と揶揄する人たちがいます。けれども、本当に惨めでかわいそうなのは、そういう考えをもつ人たちなのです。一人でいることが怖くてどうしようもない人たちなのです。

「後ろ向きの不安」にはレベルがあり、自分の「一回戦で負けたらどうしよう」という不安はレベルが低いものです。自分が「後ろ向きの不安」から「前向きの不安」に切り替えるためには、物事の見方を変えることが大事だと思います。例えば、「一回戦で負けたらどうしよう」という不安を「前向きの不安」に置き換えて、「一回戦でも自分の実力より相手の実力が上だから思う存分楽しんでやろう」というふうに切り替えることです。いきなり切り替えることは難しいですが、徐々に徐々に慣れていけばいいと思います。

この本を読んで、僕は自分の不安のレベルがかなり低いことを知りました。自分よりもっと苦しんでいる人がいると思うと、こんなちっぽけな不安で挫けちゃいけないなと思いました。また、僕も「本当の孤独」を経験したいと思ったけれど、孤独と向き合うには覚悟が必要だと感じました。単純に、一人でいることは寂しく感じるものです。けれども、みんなと一緒にいることと同じように、一人でもいられる自分になりたいと思いました。そして、少し怖いですが、己の心というものを深く深くのぞいてみようと思います。

多様性の大切さ

弘前市立東中学校　小野史織

「僕は、人間は人をいじめるのが好きなんじゃないと思う。……罰するのが好きなんだ。」これは、本書の中で主人公（息子）が言った言葉です。

私がなぜこの『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』という本を選んだかというと、本のタイトルが気に入ったからです。そして、本を読むのが苦手な私でも読めそうだと思ったからです。

この本の著者であるブレイディみかこさんは、イギリス南部の都市ブライトンに住んでいるライターです。そして、夫はアイルランド人、息子が一人います。もともとは、比較的お金に余裕のある人が住んでいるエリアにいて、そこに小学生の息子が通っていました。そのままいくと、カトリック系の穏やかで上品な学校に通うはずでしたが、ある日突然、息子が元底辺中学校に通うと言い始め、進学します。そして、その中学校では、差別や貧困などの様々な問題があり、その問題を僕（息子）とパンクな母ちゃんは、ともに考え、悩み毎日を乗り越えていく、そんなリアルなストーリーです。

私は、この本の中で三つの場面が印象に残りました。

一つ目は、元底辺中学校でのアラジンのミュージカルで、アラジン役のダニエルの声が本番で出なくなった時に、息子が舞台裏でかわりに歌っていた場面です。

実は、私も小学校での劇で似たような体験がありました。その劇では、俳優と声優などに分けていました。なので、俳優の動きと声優の声がバラバラな時もあったりしました。

ある日、声優の人が何人か休んだ日がありました。そして、その日、劇の練習では他の声優の人達が、休んでいる人の分を全員で分けて担当していたのです。私はこの光景を目の当たりにして、とても驚きました。私は、改めて協力することの大切さを知りました。

二つ目は、元底辺中学校の古参教師のミセス・パープルと呼ばれている人が主人公の母ちゃんと話している時に、ミセス・パープルが次のように言った場面です。

「お腹がすいているとき、他の子たちも同じ境遇だったら口に出して言えるけど、自分だけだったら言えなくなる。」

私はこの文を読んで、多数決の時の自分を思い出しました。私はいつも、「この選択肢なら多数派のはず」などと、自分の意見なども無視してでもそうしてしまいます。

なぜなら、多数派にいることで安心するからです。少数派になると、多数派よりも味方が少なくなり、不安な気持ちになってしまうからです。ですが、このままでは周りの意見にふり回されることになってしまうので、普段の生活の中でも自分の意見を言うようにしていって、少しずつでも直していこうと思いました。

三つ目は、夏休みに日本に帰省した時に、ＤＶＤのレンタル屋に行き、ＤＶＤをかりるため、会員登録をする場面です。そこでは母ちゃんのかわりに配偶者が登録をしようとしますが、あまり目が良くなく、母ちゃんが指示をしていると、店員さんに日本人ではないということに嫌悪感を表わにされてしまいます。

私はこの場面を読んで、差別意識のことなどを考えました。さきほどの場面のように、外人というだけで嫌悪感を表わにされていて、私は、肩書きだけで人を判断するのはあまりよくないと思いました。ですが、その差別意識を無くすることは難しいと思いました。

なぜなら、考えがすべて一緒ということがほとんどないからです。なので、自分でも少し考え方を変えてみたりしていこうと思いました。

私はこの『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』という本を読んで、イギリス社会の様々な側面が凝縮されていると思いました。

この本で学んだことは、多様性の大切さです。私は最初、「多様性は、差別やトラブルの原因になるからむしろないほうがいいんじゃないか？」と思っていましたが、この本を読んで、確かに多様性はめんどうだけれど、その分知らないことを知ることができると思いました。ですが、知ろうとしなければ、無知なままになるということを知りました。

そして、この本を読んで学んだことを生かせる場面があったら、生かしていこうと思いました。

対象作品／森絵都著『カラフル』文藝春秋

『カラフル』

弘前市立南中学校　三浦心華

「黒もあれば白もある。
赤も青も黄色もある。
明るい色も暗い色も。
きれいな色もみにくい色も
角度次第ではどんな色だって見えてくる。」

この世界は、自分の見方によってはカラフルにだってできる。この物語を読んで、自分の心に響いた言葉です。

主人公の「ぼく」は、生前に大きなあやまちを犯して死んだ、罪の魂です。二度と生まれ変われないはずなのに、急に現れた天使から

「抽選に当たった。」

と言われます。抽選に当たった魂は、人生の再挑戦のチャンスを得て、生きている人間の体に「ホームステイ」し、自分の罪を思い出さなくてはなりません。「ぼく」は前世の記憶が一切ないため、すべて自力で前世のあやまちを見つけることになります。

ホームステイする人間の体の持ち主は、自殺を図ってもうすぐ死んでしまう「小林真」という少年。一体何があって自殺を図ったのかが気になり、どんどん読み進めました。前世のあやまちが、この自殺に関係しているのかなども気になりました。

真の両親は、優しいけど性格が少し荒く、兄も勉強はできるけど、真のコンプレックスをいじってきます。学校のマドンナ的存在の少女は、自分本位でほしいもののためならなんでもします。「ぼく」のサポート役の天界から降りてきた天使の「プラプラ」は、口が悪く思ったことをすぐに口に出します。登場人物たちはみな魅力的です。

実は、いじめられて生きるのが辛くなって自殺した小林真の魂が「ぼく」でした。前世のあやまちを見つける過程で、世界の見え方に色がついてきて、この世界はいろんな色であふれている、と「ぼく」は気づきます。ホームステイとは単なる魂の修行ではなく、いちど自分を捨てた魂が、もういち

ど自分に戻れるかどうかのテスト期間だったのです。

私がこの小説を読んで一番考えたのは、「一度きりの人生で自分は何をしたいのか」ということです。そのために何を頑張るべきなのか、将来は何をしたいのか、その夢を叶えるためには何が大切なのか……。

私が好きなことは誰かにとっては嫌いでもあるし、私にとって嫌いなことは誰かの好きでもあります。いろんな意見があって、個人の考え方も様々です。だからこの世界は、〝カラフル〟なのだと思います。

私は苦手な人がいても、我慢したり、少し遠目で見ることが多いです。だから、嫌いな人を突き放すのではなく、その人のいいところをしっかり見て理解できるようになりたいです。そしてこれからは、もう少し自己主張もして、自分を強くしてきたいです。

「ぼく」は、小説の最後でこう言います。

「ときには目のくらむほどカラフルなあの世界。あそこでみんなといっしょに色まみれになって生きていこう。それがなんのためだかわからなくても。」

私の人生は「ぼく」とはちがって一度きりなので、再挑戦やホームステイなどはありません。だから、〝カラフル〟なこの世界で迷わないように、自分としっかり向き合っていきたいです。

この先、いろんな色を取り込めなくなって苦しくなることもあるかもしれません。だけど、私はいろんな価値観をもって、カラフルにできるよう、しぶとく生きようと思います。

対象作品／辻村深月著『ツナグ』新潮社

心から向き合うこと

弘前大学教育学部附属中学校　久保心晴

死者と生者を一生に一度だけ会わせてくれる「ツナグ」。もしツナグが現実にいたら、私はツナグを使うのだろうか。

私が印象的だと思ったのは、二人の女子高生の話だ。気が強い嵐が、親友である御園に嫉妬心がつのり、軽い気持ちで起こした出来事が不幸を呼び、最悪の事態へつながってしまう。

嵐はなんでも自分が一番でないと気がすまない性格だ。ずっと御園より優れていると思っていた自分が主役を演じられず、御園が演じると告げられたとき、絶望と怒り、嫉妬などの様々な感情がわき上がって、自分を制御できなくなっていたと思う。もしかしたら嵐は、「誰よりも優れている自分を肯定してくれる御園」が好きだったのかもしれない。

嵐のだめだった部分は二つあると思う。

一つ目は、御園を信じなかったことだ。たまたま耳にした、「わたしには絶対敵わないよ。」という御園の言葉を一度も疑わずに、ただ「裏切られた」という自分の感情を優先してしまっていた。また、嵐の中で大きくなっていった嫉妬心から、いつも通る下り坂に水をまいて凍らせようとした。つまり、自分しか見えていなかったことが問題であると思った。

殺意までわき上がる嫉妬ってどんなものだろう、と私は思った。「試合に負けて悔しい」とか、「あの子はなんでもできていいな」と思うことはあっても、そこまでの感情を私は経験したことがない。人を妬んでしまうのは、実は自分に自信がないからなのではないか。自分に自信がないと、自然に自分の悪いところが目立って自己嫌悪に陥ってしまう。だから、私は私だ、私には私だけのいいところがある、と開き直ることも時には大切ではないかと考えた。

二つ目は、自分のしたことを伝えなかったことだ。嵐はツナグを介して死後の御園と再会したのにもかかわらず、自分の誤ちを話さず、ただ謝るだけだった。それは自分たちの、「親友」という特別で危うい関係を壊したくなかったからだと思った。このまま見せかけでもきれいなままの関係で御園

を旅立たせたいという、嵐なりの優しさだったのかもしれない。しかし御園と別れた後、嵐はツナグから、「道は凍ってなかったよ。」という御園の伝言を聞く。それを聞いた嵐は激しく動揺し、泣き崩れてしまう。

御園はこう考えたかもしれない。もし嵐が御園に会って、自分の犯したことを話してくれたら、伝言は嵐にとって許しの言葉になる。逆に、嵐が自分の行動を言わずにごまかして話を終えるようであれば、伝言は一生嵐を後悔させ、もう一度嵐のしたことを見つめ直すきっかけになる、と。本当にそうだとしたら、嵐は死ぬまで自分の罪を背負っていくだろうと思った。そして御園を超える友人には、もう二度と出会うことはないだろうと思った。

嵐は、永遠に御園の死と自分がやったことを忘れないだろう。それほど御園は嵐にとって大切で特別な存在だった。

私にも、祖父を亡くした経験がある。祖父が亡くなった直後は実感がなく、心から悲しいと感じなかったと思う。本当に実感したのは、その三ヵ月後ぐらいだろうか。一人で祖父のことを考えていたら、「もう祖父には会えないんだ」という考えが初めて頭に浮かんだ。くさいと言いながら好きだったタバコの匂いも、一緒に将棋をすることも、もう二度とできないと思うと、自然に涙が流れてきた。私は、このとき初めて祖父の死にきちんと向き合ったような気がする。

現実では、死者と生者が再会することはありえない。そして、もし会えたとしても、嵐と御園のようにハッピーエンドにならないかもしれない。だからこそ、今生きている私たちはきちんと大切な人に自分の思いを伝えなければならない。

私は私の祖父に対して、きちんと気持ちを伝えていなかったと思う。祖父の優しさに甘えて適当に話を流してしまったり、何となく照れくさくて気持ちを伝えていなかったりした。このように、後から後悔してももう遅い。今生きている両親や祖母など、たくさんお世話になった人にきちんと感謝の気持ちを伝えるべきだ。特に近い関係の両親には思いを伝えておきたいと思った。そして自分自身も、「明日死ぬかもしれない」という思いで、やりたいことを思いきりやっていきたいと思った。

この本で私は、人にきちんと向き合うことの大切さを学んだ。嵐は、御園が生きている間に御園と向き合って罪を償うことはできなかったけれど、これから時間をかけて反省して、また自分の幸せを探していくと思う。私も友達や家族などの人間関係で悩むことがあっても、逃げずにきちんと向き合い、後悔しないように自分なりの人生を歩んでいきたい。

対象作品／百田尚樹著『永遠の０』講談社

久蔵と共に願う

弘前市立南中学校　中田吏紀

もう半年が経つのか。

テレビのニュースの大半を占めていた戦争のニュース。最近はそんなに長い時間、放送されなくなった。最初は大変だ、と騒いでいたのに、時間が経つと戦争自体が小規模化したのか、ただ日本のニュースに入らなくなったのか、人々の関心がなくなったのか、他の国のことだからどうでもいいのか。テレビのニュースで、今年は終戦七十七周年だと知った。七十七年経った今、中学生の僕はどれだけ戦争のことを知っているだろうか。そんなとき、本屋にある『永遠の０』という本を見つけた。

正直僕は、戦争についてあまり知らなかった。でも、ニュースでみたあの悲惨な光景や、日本に避難してきたウクライナ人の今の生活を目にすると、一人の人間として改めて戦争についてもっと知る必要があると思った。

主人公は、今を生きる健太郎と、その祖父の宮部久蔵である。久蔵は神風特攻隊員として戦死していた。健太郎が祖父の存在を追いながら、祖父の生き方を感じていくのであるが、戦時中の祖父について知っていくことで、健太郎自身も祖父の生き方にひかれていく。僕はまず、特攻で亡くなった人が約四千人もいたことに驚いた。皆、国のために、と自らの命を惜しまず、敵の艦隊めがけて飛んでいく。そして帰ってくることはない。でも本当に、国のために死にたいと思っていたのだろうか。今の僕に、国のために飛ぶ勇気はない。そこには、死ぬことへの恐怖もあるし、何より今の生活がなくなってしまうことの恐怖、そして家族や友達と離れることへの恐怖など、恐怖しかないと思う。きっと、戦闘機に乗る勇気すらないと思う。どうしてみんなは嫌だと逃げださなかったのだろうかと考えると、そうしなければならないという戦争の教えの恐ろしさと、毎日のようにそうすることが普通になっていくという恐ろしさがあると思った。そう考えると、本当に戦争は恐ろしいものだと改めて思ってしまう。そんな中、久蔵は誰よりも生きることにこだわり、生きたい、死にたく

ない、と堂々と自分の気持ちを貫いていた。久蔵の〝生〟にこだわる理由は、妻と子どもの存在にあった。家族のために死にたくないと、一生懸命生きていたのだ。周りにも、生きろ、と話し、戦争が終わった後に自分たちに何ができるかを聞いたりするシーンに、僕ももし、久蔵の側にいるとしたら、未来の日本についてとか、自分について笑って話したいと思った。戦争が終わったら…という希望を持ちたい。そんな希望を持つことも本当は許されないのかもしれないけれど、夢や希望を語りあえる友も作りたい。それは戦争中であっても、戦争中でなくても同じことなのかもしれないと思う。昔の若い人たちも現代の僕たちも、大切な家族を思う気持ちや夢を語りたいと思う気持ちは一緒なのに、戦争はそれを認めてくれない。とても苦しかっただろうなと思う。

久蔵を調べていくにつれ、死にたくないといった卑怯者だという人もいれば、誰よりも強い男だったと語る人もいた。健太郎は、久蔵の家族への愛や部下への愛を知り、戦争中であっても、一人の人間として愛を大切に生きた祖父を大切に思えるようになっていった。もしかしたら、久蔵のことを卑怯者だという人は、きっと久蔵の生き方をうらやましいと思っていたのかもしれない。強い人だと語る人には、これから生きなければいけない、生きていくんだという強さをもらったのかもしれない。いずれにしろ、久蔵の生き方は、周りに大きな影響を与えたのだと思う。

最後に、久蔵は特攻隊として自らの死を選ぶ。僕は、なんであんなに生きようとしていた人が、最後に特攻隊として死ぬことを選んだのか疑問に思った。本を読み終えた今でもその答えは見つからない。もしかしたら、孫の健太郎は祖父の思いを理解できたのかもしれないが、特攻で死んでいく多くの仲間を見て、もう、人が死ぬのを見たくなかったのかもしれない。そして、一人でも自分の思いを引き継ぐ若者が自分の代わりに生きることで、自分の家族の未来と日本の未来とをたくしたのかもしれない。でも、生きたかっただろうなと思う。

この本を読んで、今を生きる僕たちは、もっと戦争や戦争の悲惨さについて知るべきだと強く思った。自分のことばかりではなく、もっと周りに目を向けて、大事なことを知ることが、もう二度と同じ悲しいことを引き起こさない世界を作っていくのだと思った。生きろ！という久蔵の言葉が、僕の心に残っている。今の僕は、どう生きていかなければならないのかを考えることで、平和な明日につなげていきたい。

対象作品／千野境子著『江戸のジャーナリスト葛飾北斎』国土社

時代を創った葛飾北斎

弘前大学教育学部附属中学校　橋本和香

もしも私がイラストレーターを職業として生きていくなら、どのようなことを大切にするだろう。絵を見る人がどのような好みなのかそれぞれ分からないし、どのような絵を描けば喜んでくれるかも分からないので、きっとそのときに流行っている画風を真似して描くだろう。

葛飾北斎は、日本史の教科書には必ず出る、とても有名な浮世絵師だ。彼が生涯のうちで描いた絵画は三万点以上。六歳のころから模写に関心をもち始め、亡くなる日の何ヶ月か前まで浮世絵を描き続けているので、もはや生まれた直後から死に際まで絵を描き続けていたと言っても過言ではない。それに、彼は食べることを忘れ、朝から晩までずっと描き続けていた。私は絵を描くことを趣味としているが、絵を一枚描き終えるだけで、もうこれだけでいいやと思ってしまう。彼は物凄い意欲の持ち主だと思った。

もともと「浮世」は、「憂き世」という「この世」を表す言葉だった。次第に意味を変え、江戸時代の人々の生活の中の楽しいことや美しいこと、悲しいことなどを表すようになった。富嶽三十六景の神奈川沖浪裏や、東海道中膝栗毛など、壮大な自然や旅行の楽しさなど、様々なバリエーションで人々を楽しませた。さらには洋風画に挑戦したり、朝鮮通信使を描くなど、新しいことにもチャレンジしている。

しかし、なぜ彼は人々の好みの関係なしに、新しいことにも挑戦することができたのか。普通なら、いかにも買ってもらえる流行りの画風にすると思うが、なぜ彼はそんなことは気にせずに最先端の作品を創り出したのか。

それは、彼の生き方にあった。人の付き合いに深く入り込まないようにするため、人生で九十三回も引っ越しをし、家は全く掃除をしない。ご飯を食べることを忘れる。お金を貯めることが苦手。それはあまり良くない生き方だと思うが、これこそが、「葛飾北斎」という独自の世界を開いてゆく方法なのだ。絵が多く売れたり、挿絵の依頼を受けたりしても、それだけでは満足できない。それは、「葛飾北斎」を創り上

げるための長い助走にすぎないのである。彼は、人生に三万点以上の作品を作ったのだから、尽きることのない意欲と好奇心があったのだろう。

彼の辞書に「老後」という言葉はなかった。普通は、幼少期、青年期と体が発達していき、二十歳ごろから体力の低下がどんどん進行していく。しかし、彼にとっての「加齢」は違った。七十歳までに生物や植物を知り、八十歳になればどんどん上達する。そして、九十歳で奥義を極め、百歳で人間の能力を超えた神妙の域に達することができると考えていたのだ。

彼のその能動的な行動は絵に限らず、日々の生活にも関係していると思う。私は今まで絵を書くことから、生活のさまざまなことまで、人の目を気にしていた。そして、人から言われたことは止め、皆の行動に合わせていた。しかし、彼は真逆だった。当時の流行りとは違う新しいことをすることで、皆に「こんないいものもあるんだよ」と働きかけていた。素直に皆に提案することで、皆がその意見の価値を知って、多種多様な考え方をもてる人間になれるのだ。

新しいことにも、ちゅうちょせずに挑戦する。そして、周りの人にも自分を積極的に素直に表現していける、彼のような人間になりたい。

対象作品／M・G・ヘネシー著『海を見た日』鈴木出版

中学校二年の部　佳作

本当の家族への旅

弘前市立第四中学校　石戸　たまき

家族ってなんだろう。血のつながりだけが家族の証なのだろうか。ふと、そんなことを考えさせられた。

この本には、それぞれ事情を抱えた五人が登場する。一人目は私が最も共感できた人物、ナヴェイア。彼女は幼いころに母を亡くしたため里子に出されて、今はミセス・Kという里親のもとで暮らしている。二人目はナヴェイアの里子の弟、ヴィク。彼はADHDという発達障害を持ち、周囲に相手をしてもらえないことから、よく妄想の世界に浸って

いる。三人目は里子の妹、マーラ。彼女は英語が話せないため、口数が少ない。四人目はナヴェイア、ヴィク、マーラの里親である、ミセス・K。彼女は里親であるものの、夫に先立たれた悲しみからふさぎ込んでおり、里子の面倒を見ることがままならない。そんな彼女に代わって、ナヴェイアは母親の役割を一手に引き受けているのだ。私はナヴェイアを尊敬した。私と同じ年ごろの女の子で、やりたいことはいくらでもあるだろうに、彼女は自分の気持ちを封じ込め、ただ淡々とやるべきことをこなしている。その姿は、簡単に真似できるものではない。

この四人のもとに新しくやってきたのが、この話のキーパーソンとなる五人目、クエンティンだった。彼は母親ががんで入院したことがきっかけで里子に出された、アスペルガー症候群の男の子だ。彼は母親に会いたいという思いから、ミセス・Kの家を飛び出してしまう。ここから、四人の子どもたちの冒険の旅が始まる。

最初は乗り気ではなかったナヴェイアも、その旅の中で、今まで封じ込めていた自分の気持ちを解き放つことができた。ナヴェイアの今までを考えると、世界はつらいものでしかなかっただろう。それが他の里子たちに、いや「姉弟（きょうだい）」たちに振り回されたことによって、世界の美しさや楽しさに気づけたのだと思うと嬉しくなった。

旅の目的であったクエンティンの母親は、もうこの世界にはいなかった。きっと以前の合理的なナヴェイアだったら、この旅は失敗だ、と決めてしまっていたと思う。しかし、ナヴェイアはそこでは終わらず、この旅の最後を少しでもいいものにしようと、「海へ行く」と言い出したのだ。

この旅で四人の姉弟は、楽しい、美しい、悲しい、などの様々な気持ちを共有できたように思う。そして、この旅は里親であるミセス・Kの心すらも動かしていく。ミセス・Kは家事もするようになり、泣くことも少なくなった。まるで本当の母親のようになったのだ。

このバラバラだった五人が、本当の家族のようになれたのは、旅があったからだと思う。気持ちをぶつけ合い、共有し合って心の壁を壊した先で、本当の家族になれるのではないだろうか。合理的に行動することはもちろん大事。だが、時には家族で過ごす時間をつくり、そこから生まれた感動こそが、人を成長させてくれるのかもしれない。

私は、この本を読むまで正直なところ、里子や里親、特別支援を必要とする発達障害の子について、身近に感じたことがなかった。また、家族がいること、何不自由なく生活できていること、今まで当たり前だと思っていたことに感謝の念がわいてきた。その当たり前がない子どもたちも多くいることに気づかせてくれた、この本に出会えてよかったと思う。私は将来子どもと関わる仕事がしたいと思っている。きっとその現場には、複雑な事情を抱えた子、支援を必要とする子、

様々な子がいるだろう。そういった子どもたちと関わる時、特別視するわけではなく、同じ目線でその子の気持ちに寄り添い共有し、少しでもいい思い出をつくるお手伝いができるようになりたい。

中学校二年の部　佳作

対象作品／百田尚樹著『夏の騎士』新潮社

「勇気の剣を手に入れるために」

弘前大学教育学部附属中学校　赤石　三奈美

あの夏、ぼくは勇気を手に入れた。

これは『夏の騎士』という本の帯に書いてある一文だ。私はこの一文にとても心を惹かれた。なぜなら、私には勇気がないからだ。この本を読めば私も勇気を手に入れて、今の弱い自分を変えることができるのではないか、と思いこの本を読むことにした。そして書き出しの一文を読み、一瞬でこの物語に引き込まれていった。

勇気―それは人生を切り拓く剣だ。主人公は、一体どんなふうに人生を切り拓いていったのか、早く知りたいと思いながら読み進めた。

この本は、弱虫で臆病な主人公の宏志が六年生の夏に、友人の陽介、健太と共に騎士団を結成し、様々なことに挑戦、奮闘しながら勇気を手に入れていく物語だ。

宏志が最初に勇気を出して行動したのは、陽介や健太に声をかけ、騎士団を結成した時だ。クラスメイトたちに騎士団のことを馬鹿にされ、宏志は逃げ出そうとしたが、自分と同じ臆病者だと思っていた陽介と健太の勇気を目の当たりにし、自分も勇気を出してクラスメイトに言い返したのだ。その勇気をきっかけに、宏志は騎士団の仲間と苦手な勉強に取り組んだり、困っている人を助けたり、様々なことを乗り越えどんどん成長していく。

もし私が宏志だったら、笑われた時点ですぐに諦め、騎士団を解散してしまうだろう。それ以前に、「自分には出来るわけがない。」と最初から決めつけて、騎士団を結成すらしていないと思う。

例えば学級役員を決める時、私はやってみたい係があって

も、「上手く出来ず馬鹿にされたらどうしよう。自分には無理だろう。」ということばかり考えてしまい、いつも手を挙げられないまま別の人に決まってしまう。クラスメイトや友だちが勇気を出して挑戦しているのを見ても、宏志のように勇気を出すことができず、友だちや親の前では悔しがって見せるが、内心では他の人に決まってホッとしてしているのだ。こんな風に私はいつも失敗を恐れ、やる前に諦めてしまうことが多いので、最初は臆病な宏志と私は似ていると思っていた。でも、勇気を出して行動し、段々成長していく宏志の姿がとても羨ましく思えてきた。

大人になった宏志は、「人はみな勇気の種を持っている。それを大きな木に育てるのはその人自身だ。」と言っている。その言葉は、私の両親がいつも言っている「やるのは自分なんだよ。」という言葉と同じだなと思った。両親は私が悩んだり前に進めずにいる時、いろいろアドバイスをしてくれる。せっかく私の勇気の種を大きくするきっかけを作ってくれているのに、私は言い訳ばかりして、なかなか行動することができずにいる。でも、弱い自分を変えることができるのは、やはり自分しかいないのだ、と改めて感じた。もし、今までほんの少し勇気を出して行動することができていたら、私の勇気の種は、どれくらい大きくなっていたのだろうか。とてももったいないことをしてきたなと、急に不安になってしまった。でも、両親は今からでも大丈夫と言ってくれたので、これからは失敗を恐れず、勇気を出していろいろなことに挑戦してみたいと思う。そして、自分の中の勇気の種を成長させて、その成長した勇気を、人生を切り拓くための剣にしたい。もし、今までのように弱い自分が邪魔をしたらこの本のことを思い出して、大人になってから後悔することがないよう、勇気を出して頑張ってみようと思う。

中学校二年の部　佳作

対象作品／冬野夜空著『一瞬を生きる君を、僕は永遠に忘れない。』スターツ出版

彼女のように

弘前市立南中学校　相馬一護

「君を私の専属のカメラマンに任命します」

この一言が、一人の男の子を大きく変えた。

あることをきっかけに、クラスの人気者の綾部香織と、正反対といってもいい性格の天野輝彦の、カメラマンとモデルという関係が始まった。常に笑顔を絶やさない香織に振り回される輝彦だったが、ある時、香織が笑顔の裏で重い血液の病気と闘っていたことを知る。それを知った輝彦の決意。たった二ヵ月間の苦しくて切なく、でも、美しい二人の物語だ。

読もうと思ったきっかけは単純なもので、カバーイラストがきれい、という理由だけだった。しかし、読み進めていくと、二人の究極の純愛があった。読み終えた後には涙が止まらず、手に取ったときのようにカバーイラストとタイトルを見てみると、彼女の表情やタイトルに全ての感情や想いが詰まっているなとすごく感じて、そこでも涙が止まらなくなった。この物語で、僕は香織が重い病気と闘っていることを知ってからの、輝彦の決意に胸を打たれた。「僕は最高の写真を撮りたい。病気を受け入れた上で笑っているものではなくて、君が心から笑っている写真を撮りたいと思ったんだ。」という輝彦の決意の表れがあふれ出た言葉に感銘を受けた。他にも、好きなシーン、言葉が数え切れないほどある。その中でも、「私も、君に撮ってほしい。」という香織の言葉が好きだ。生きる気力さえ失ってしまいそうな中で、最後に撮った彼女の写真。そのシーンを想像するたびに、人の命とは儚（はかな）く、美しいものだと思える。

この物語の素晴らしいところは、輝彦の変化だ。はじめは、嫌々撮っていた輝彦が、香織の病気をきっかけに、香織のことを自ら撮ろうとし、知ろうとする。そんな姿が、僕にはかっこよく思えた。

香織から、輝彦へあてた手紙がある。その手紙には、香織の輝彦へ対する本当の想いが詰まっていた。「本当は君の恋人になりたかった。本当は君ともっといろんなことをしたかった。本当は君ともっと生きていきたかった。」たったの三

文に、僕は心から感動した。彼女の手紙には、「君」という言葉が多く使われている。これには、君のことしか見ていないよという、彼女のひそかな想いだったのではないだろうかと考えた。手紙の中の一つ一つの言葉にも、たくさんの意味があると分かったときには鳥肌が止まらなかった。

輝彦のように、彼女のために泣いてくれるのは、きっと、彼も彼女を想っていたからだと思う。彼女との時間が楽しいと思えば思うほど、亡くなったときには悲しくなってくるものだと思う。それは、彼女も人に想われる、愛される人だったからだとも思う。僕は、そんな彼女を心から尊敬している。辛いときでも、笑顔で誰からも好かれていた彼女のこと。でも、時折見せる儚げな表情。彼女の本当の気持ち。今や、尊敬と言うよりもっと大きな感情なのかもしれない。

僕はこの本を読んで、人を愛し、人に愛されるような人になりたいと強く思った。そのために、彼女のように誰にでも優しく接していけるようになりたい。どんなに苦しくても辛くても、最後まで笑顔でいられるような人になりたい。どんなに辛くても最後まで笑顔だった彼女のように。

対象作品／壺井栄著『二十四の瞳』ＫＡＤＯＫＡＷＡ

自由と平和

弘前大学教育学部附属中学校　成田　充希

私には将来の夢がある。私の将来は、私自身が自由に考え、決めることができる。そして、その夢を、私は家族や友人に自由に語り、家族や友人は、その気持ちを尊重してくれる。それは日常の当たり前のことで、その自由が平和のうえに成り立った大切な権利であるということを、改めて考えたことは無かった。この本に出会うまでは。

物語は、戦前の昭和三年、瀬戸内海べりの一寒村へ赴任してきた、新米教師の大石先生と、それぞれの個性に瞳を輝かせる十二人の新一年生との交流から始まる。「この瞳を、どうしてにごしてよいものか！」と決意する大石先生もまた、教師一年目として、はつらつとした姿であった。

それから四年後、子供達は成長し、五年生となって、岬の分教から本校に通い始める。海の色、山の色は、そっくりそのまま昨日に続く今日でもあったが、子供達の生活は、大きな歴史の流れの中に置かれていた。日本の改革を考える新しい思想には政府の圧迫が加えられ、同じ日本のたくさんの人々が牢獄（ろうごく）に封じ込められるなど、時代は戦争の色を濃くしていった。

やがて、子供達は巣立ちの時を迎えたが、それぞれの家庭の事情により、その境遇には格段の差があった。奉公に出される子、裁縫学校へ行く子、軍人になる子、希望に満ちあふれたものであるはずの子供達の未来に、戦争という時代の流れや、貧困という家庭の事情が暗い影を落としていた。自分ではどうすることも出来ない運命を受け入れる子供達を前にして、大石先生はもどかしく、耐えられないのであった。ここまで読み進めていくうちに、この十二人の子供達は、私と一緒に成長してきたのではないかという錯覚を感じた。私もこの中の一人なのだ、そう思うほど感情移入していた。

遂に、日本は軍国主義一色となった。人の命を花になぞらえて、若い命を散らすことこそが名誉との教育をしない者は、国賊（こくぞく）とみなされる時代にあっても、大石先生は、「名誉の戦死など、しなさんな。生きてもどってくるのよ。」と教え子

たちに声をかけ、戦争という時代の理不尽さの犠牲にならぬよう、慈愛に満ちた心で、岬の教え子たちを最後まで導いたのであった。私はそこに、大石先生の決して消えることのない子どもらを愛する光を見た。

さて、いま私が生きている、この令和の時代はどうだろうか。令和四年八月十五日は、七十七回目の終戦記念日を迎えた。しかし、その一方で世界に目を向ければ、ロシアによるウクライナ侵攻が続けられており、ロシア国内では「反戦の意」を唱えようと行動を起こした国民が拘束されるなど、政府による厳しい弾圧が行われている。その状況は、「戦争だけを見つめ、戦争だけを信じ、身も心も戦争の中へ投げ込めと教えた。そしてそのように従わされた。」という昭和初期のこの物語の時代と、何ら変わっていないようにも感じられ、恐怖を覚える。現代においても、戦争下で治安を維持するために、人間の精神の自由をしばる行動が、今もなお、行われているのである。

戦争は、人々の生活から、言論や行動の自由、そして夢や希望を奪う残酷で悲惨なものである。どうかこの悲惨な状況が、一刻も早く終結する日が来ることを、私は願わずにはいられない。

また、問題は海外のみならず、この日本でも起きている。それは貧困の問題である。厚生労働省の調査によると、日本の子供の七人に一人が、貧困状態にあると示されている。富士子や松江、コトエがそうであったように、家庭環境の問題により、進学や将来の夢を諦めざるを得ない状況が、現代も解決すべき深刻な問題として存在しているのである。私たちはこの問題をもっと自分事として捉え、社会全体の課題の解消に向け、働きかけていくことが必要であると思う。

昭和の戦前から戦中・戦後と、激動の時代を生き抜いた、大石先生の教師としての温かく、何の偏見にも捉われない真っすぐな瞳は、「反戦」「命の尊さ」を現代の私たちに伝えるとともに、当時と今なお変わらぬこの社会の問題を、訴えかけている。

戦争に人生を翻弄される時代を再び繰り返すことは、決してあってはならない。いま手にある平和と、思想や言論、職業の選択などにおける自由の権利は、人間が勝ち取ったものなのだ。さらに、この先の世代へも繋(つな)いでいかなければならない。そして、生まれ育った環境に左右されること無く、一人ひとりが自分の夢に向かって励み、輝ける社会へと歩みを進めることが、令和を生きる私たちの責任なのだ。

対象作品／辻村深月著『ツナグ』新潮社

死について考えること

弘前大学教育学部附属中学校　平賀寛菜

「死んだ人間と生きた人間を会わせる窓口。僕が使者（ツナグ）です」

この本では〝使者〟によってもたらされる死者と生者の一晩が、生者の立ち場で描かれている。『ツナグ』は、人間の死についての私の考えを大きく変えた、印象に残る一冊となった。私は、この本を通して考えたことが二つある。

一つ目は、死とはいったい何なのかということだ。今までにも、人間が本当に死ぬのはいつだろうと考えたことがあった。そんなときに、私の父はこう言っていた。

「家族、友達、自分を知る人……。全員に自分という存在が忘れられたときに、その人は本当の死を迎えるのだと思うよ。」

この言葉を聞いたときは、いまいち納得することができなかった。息の根が止まり、燃やされて灰になる。誰かが死んだ人のことを覚えていても、地球上で再会することはない。つまり、その人の身体など〝形〟が消えてしまった状態が、その人にとっての死だと考えていたからだ。しかし〝使者〟を通して再会する死者と生者をみて、考えが変わった。生者は死者と再会することで、死者から何かを得たり、逆に背負わせられたりしていた。そしてそれは、生者にとってプラスであれマイナスであれ、何かしら生者の一部となっていた。生者の一部となった死者、それが死者の〝形〟であり、その〝形〟が生者の中に存在している限り、死者は本当の死を迎えることはないのだと思う。

二つ目は、私が誰かの死と直面したとき、それを受け入れられるかということだ。先程述べたように、死者は自分の一部として在り続け、消えてしまうことはない。しかしこのような考えは、本当に誰かの死に直面したときには、ほんの小さな支えにしかならないと思う。私は五年前に祖父を亡くしたとき、胸（むね）が張り裂けるような思いだった。目の前で横たわる祖父の頬（ほほ）に触れると、氷のように冷たくて、硬くて、心臓がドクッと嫌な音を立てたことを覚えている。しかしこの時、冷たくなった祖父に触れ、異臭に気づいても、祖父の死

を受け入れられなかった。それは、心の中に小さな、小さな希望があったからだ。この時抱いた小さな希望は、『ツナグ』の登場人物の一人、土谷さんと同じものだったと思う。彼は、旅行に行くと言ったきり失踪した妻・キラリを七年待ち続けていたが〝使者〟に巡り合い、妻の死を知ることとなった人物だ。彼は妻の死を知ったとき、こんな言葉を述べていた。

―私は、キラリに生きていて欲しかった。どこかで今も、生きていて欲しかった。―

この言葉に全てが詰まっている、と思った。〝使者〟に妻の生死を聞いてしまったことへの後悔、妻は生きているという期待が打ち砕かれたことへの悲しみ。死を告げられ、故人の体に触れ、もう息を吹き返すことはないのだと理解しても。今までの思い出をなぞっているうちに、頬を伝った涙の味に気づいても。どこかで、あの人はまだ生きているのではないかという希望を抱くのは自然なことだと思う。今までの死者との思い出が濃く、過ごした時間が自分の宝物であるほど、その人を失うというのがどういうことなのか分からなくなる。少なくとも今の私は、大切な人の死と向き合ったとしても、それを受け入れることはできそうにない。死との向き合い方は、これからも私にとっての大きな課題となるだろう。

今、世の中はコロナ禍三年目を迎えているが、状況はいまだ落ちつきそうにない。また、ロシアのウクライナ侵攻についても世界中が危機感を示している。先の見えない今、『ツナグ』を通して感じた、私が大切にしていきたいこと。それは〝今ある出会いを大切に〟して生きることだ。人との出会いは一瞬一瞬の巡り合わせだ。もしかしたら自分は明日死んでしまうのかもしれないし、はたまた急に大切な人がいなくなってしまうのかもしれない。残酷な話だが、私たちの生(せい)は百パーセント保証されているとはいえない。いつかは必ず、自分にも身の周りの人にも訪れる、死。その瞬間をどんな形で迎えようとも、後悔はないと言い切れるような生き方をしたい。そのために必要なのは、今という限られた時間と人との出会いを大切にすること、そして何より、常に死について考え続けること。死との向き合い方や死そのものについての考え方に正解や終わりはなく、私の十年後の考えは今と異なっているはずだ。それは、死というものがあまりにも漠然としているからだ。

この漠然とした〝死〟について考え続けることが、自分の生き方を見直し、新たな生き方を模索するきっかけとなるだろう。〝死〟とは私にとって、永遠のテーマである。

対象作品／キャット・クラーク著『パンツ・プロジェクト』あすなろ書房

誰もが自分らしくあるために

弘前市立第五中学校　八木利菜

最近〝多様性〟という言葉をよく耳にするようになった。人種、年齢、価値観や国籍、宗教や性別、障がいの有無などの違いを互いに理解し、尊重し合うことが大事だと価値づけられている。

二〇二一年夏、コロナ禍による一年の延期を経て、東京オリンピック・パラリンピックが開催された。アスリートたちの熱闘とともに注目を集めたのが、前回大会から二倍増しになった男女混合種目と、ＬＧＢＴ選手の活躍である。アスリートが声をあげたことは大きな意味があり、スポーツ界が〝多様性〟を受け入れていく上で、大きな前進となった大会で記憶に新しい。

本の表紙に「いつだって、自分の好きな自分らしい自分でいたい！」という強い意思表示がされていた。自分が自分らしくあるためにはどうしたらよいのだろうか。

ＬＧＢＴとはレズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーの頭文字をとった呼び名である。性的少数者ともいわれている。主人公のリヴは、自分の抱えている違和感を探っていくうちに〝トランスジェンダー〟という言葉に行きあたる。身体的には女の子で、周囲からも女の子として認識されているが、リヴは自分自身を本当は男の子だと思っている。家族や友達に真実を打ち明ける難しさを感じる中で「女子の制服はスカート」という校則を変えようと闘っていく物語である。

性的少数者に対する配慮から、教育現場も少しずつ変わってきている。弘前市内の中学校でも女子の制服の選択肢が増え、スカートの他にスラックスも選べるようになった。私は、スラックスだと自転車をこぐときも楽だし、冬はスカートよりも暖かいから良いなと思った。「欲しければ買ってあげるよ」と親に言われた。しかし、自分だけだったらと考えると、スラックスには抵抗がある。周りが私をどう見るのかも気になる。だから「いらない」と断った。制服でない服装だったら自由に自分の好きな服装ができるのに、制服は「みんな同

じ」という考えが邪魔をして、自分の考えをなかったことにしてしまった。

私は勝手に性的少数者の人は、自分の周りにはいないと思っていた。そしてどこか他人事で、性的少数者の人たちは特別な人たちだという感覚でいた。しかし、調べてみると、日本では約七人に一人が性的少数者であるという衝撃の数字を知った。これは、左利きや血液型がＡＢ型の人と同じくらいの割合だそうだ。私の周囲に性的少数者の人がいないのではなく、私が「気付けていない」だけかもしれない。

リヴは自分の抱えた違和感を「サイズのあわない靴を履いているようで、窮屈で締め付けられている感じ」と表現している。私は、そんな思いを抱えている仲間を、知らず知らずのうちに傷つけてしまっていたかもしれないと感じた。性的少数者約一万人を対象にした調査では、約六割が小中高時代にいじめに遭い、約二割が不登校を経験したとの結果もある。中には自分自身を刃物で傷つけた人、自殺も考えた人もいるという事実を初めて知った。私は正しい知識を身に付けていないにも関わらず、理解者であるように装いながら、無意識のうちに差別をしてしまっていると思う。「知らなかった」では済まされないと思うと胸が締め付けられる。

自分の言動を振り返ってみると、数の多い方に気持ちが引っ張られている気がする。「普通は」という言葉は、言い換えれば「多数派は」と話しているともいえる。また、少数派を否定しているともいえる。自分を安心で安全なところに置くことで、自分の気持ちを誤魔化し、周囲に合わせていた自分がとても恥ずかしい。

自分らしく生きるとは、自分の気持ちに正直になること、周囲に流されずにやりたいことを自らで選んで生きていくことだと私は考えている。リヴが自分らしい自分であるために正しいと思った行動を貫く、力強い姿をとても尊敬できた。そして、リヴがトランスジェンダーだと知っても変わらず優しく接してくれた友達、「リヴが幸せでいることが一番の願いだ」と受け止めてくれた家族の存在が、リヴにとってとても大きな力になっていると思った。

私はこの本を読んで、どんなに少数で小さな意見でも、発信していくことの大切さを学んだ。また、苦しい立場にあるときの周囲の支えは大きく、私もそういうときにそばに寄りそえる存在になりたいと強く感じた。そのために、自分の持っているものと違っていたとしても、広い視野をもち、相手の立場に立って考えられる優しさをもちたい。誰もが平等に自分らしい自分で生きていくことのできる社会の実現を心から願っている。

中学校三年の部　佳作 ―― 対象作品／あさのあつこ著『10代の本棚　こんな本に出会いたい』岩波書店

私の読書考

弘前大学教育学部附属中学校　豊岡実欧

本を読むことが好きだ。本なら永遠に読んでいられる気がする。小学一年生のときに小説に出会ってから、活字の列から目を離せなくなっている。そのくらい本が好きだ。世の中には本を読むなんて面倒くさい、いやだと思っている人がいる。一方で私のような本好きもいる。最近、読書はどうしてこんなに人を惹きつけるのか疑問に思っている。小説よりもアニメやマンガ、動画などのほうがわかりやすく、おもしろいだろう。

そこで、読書の魅力について考えるために『10代の本棚―こんな本に出会いたい』という本を読んでみた。この本は作家のあさのあつこさん編著で、十三人の大人たちが十代のとき、本がどんな存在だったのかがまとめられている。

まず、私がこの本を読んで共感したこと、読書の魅力に改めて気づけたところはたくさんある。その中でも一番共感したのは、堤未果さんの「本は目ではなく耳で読みます。活字を目で追いながらも、頭の中で音にして読む癖がついてしまっている。」というところだ。私も読書をしているときは、頭の中で音のような映像のような、五感が全て入り混じったようなものが流れている。これは、川端裕人さんが書いていた「文字で書かれたお話の素晴らしいところは、〝余白が多い〟ことではないでしょうか」ということに関係していると思う。背景や登場人物の見た目、表情が絵でわかるマンガ、さらに声もわかるアニメなどと比べると、文字だけで書かれた小説は読者の想像に委ねているところがかなり多い。読む人一人ひとりで感じ方が大きく違い、同じものを読んでいても、一人ひとりの世界ができていくところが読書の魅力だと思った。

さらに、畑谷史代さんが「何年かに一度、無性に『氷点』が読みたくなります。読み返すたびに新たな発見があって、読んだあとに感じることも、その都度違う。汲めども尽きぬ泉のような小説なのです。」と書いているように、たとえ自分が同じ本を読んでいても、なぜか前回とは感じ方が違って

いるということがある。初回はストーリーのおもしろさをただ感じて、前回は主人公以外の人に注目し、今回は全体に張りめぐらされた伏線に気付くなど、意識しなくても一冊の本から無限通りの楽しみ方ができることも本の世界の奥深さだろう。

ところで、一口に本、その中で小説に限定してもいろいろなジャンルがある。私はその中でどれを読めばいいのか、どれを読んだほうがいいのかわからなくなることがある。今、私が主に読んでいるジャンルは、小説を大きく純文学と大衆文学に分けたうちの大衆文学である。そして、その中でも自分が気に入った作家のものばかりになってしまっている。このままでは特定のジャンルに偏ってしまうし、純文学、特に昔の文豪と呼ばれる人たちの作品を読んでみたほうがいいのではないかと思うこともある。それでも新しい本の世界に飛びこむにはわくわくする反面、勇気がいる。読んだあとに自分がどんな気持ち――嬉しい、悲しい、感動、もやもやした気持ちなど――になっているかわからないからだ。だから作品の雰囲気になじんでいる同じ作者のものばかり読んでしまう。

この本を書いた人たちは、どんな風に本を選んできたのだろうか。アン・サリーさんは十代のときの「マンホールの暗い穴にたった独りでいるような」感覚の答えを探すため。荒木源さんは中学校の先輩が薦めてくれた本や、国語の便覧に載っているような有名な本。川端裕人さんは、最初に読んだ本に関連した本を読んでいく芋づる式。そして、はやみねかおるさんは兄がミステリー好きで、その流れで推理小説。というように、人によって様々だった。しかし、ただひとつ共通していることがある。それは、みんな読書という行為と読書にかけた時間を楽しんでいたということだ。自分の興味のおもむくままに本を選び、自分から読んでこそ良い読書ができると思った。ただ、前田司郎さんが「好きな分野の本を読んでいくことで、自分の興味が拡大していって、好きなことが増えていくのは、とても楽しいことですよ。」と書いているように、好きな分野の本を読むうちに、新しい分野に興味が湧いてくるかもしれないので、読まず嫌いはしないでおきたい。

私はこの本を読んで、今まで漠然と感じていた読書の魅力を再確認することができた。さらに、本との関わり方は人それぞれで、その経験は必ず自分の糧になるというエールを十三人の大人たちから受け取った気がした。私はこれからも本を読み、私の世界を広げていきたい。まずは紹介されている本の中で一番気になった山田詠美さんの『蝶々の纏足』を読んでみようと思う。

『黒い雨』を読んで

対象作品／井伏鱒二著『黒い雨』新潮社

弘前大学教育学部附属中学校　花田萌維

「正義の戦争より不正義の平和のほうがいい」

この重松の言葉はどれほど重いものだったか。本を閉じ終えた後にも重く深く私の心に残っていた。

私は、この『黒い雨』を読み、戦争や原爆が奪ったものは、人の命だけではないということに気づかされた。戦争は、一人一人の未来の選択肢をも奪っていることが分かった。戦争を乗り越え、生きることができたとしても、その先に待っているのは、決して幸せな未来ではないと思った。本来は、手に入るはずの幸せですらも手に入らない状況にまで追いこまれた人々が多くいるということを知ることができた。

その理由は、この物語から当時の状況がよく伝わってくるからだと思う。その一例として、実際の戦争の人々の様子が挙げられる。擬態語や比喩を用いているため、私は、当時の様子を容易に想像することができた。実際の戦争を見たままの直接的な言葉で表現することにより、「原爆に対する危機感」や「戦争の恐ろしさ」という単調な言葉では言い表せない底知れぬ恐怖、そして、悲しみがひしひしと伝わってきた。それに加え、〝無知〟とはいかに恐ろしいものかが伝わってきた。黒い雨についてよく知らなかったために、黒い雨に対する安易な考えがあったと思う。それは、本書中の「黒い雨のことを人に話しても、毒素があることは誰も知らんので誤解されなんだでしょう」という文から伝わってくる。また、黒い雨が人々、世間の間でよく知られていなかったがために、異常すぎるほどの偏見の目が被爆者に向けられていたことは、重松の姪である矢須子を通して、よく伝わってきた。このように、人々の身体だけでなく、心にも、治ることのない深い傷をつけ、底知れぬ恐怖感を人々に植え付けたものが原爆、そして、戦争なのだと思った。

また、本書中に「どうしてピカドンが落ちる前に降伏することが出来なかったのか」と重松が語っていたが、これは重松のみならず、多くの人々が思い、願っていたことだと思う。私は、実際に原爆というものを体験していないが、本書を

読むことにより、以前よりもこのような言葉により強い共感を得ることができた。また、この言葉に人々は続けて、「もう負けていることは敵にも分かっていた筈だ。ピカドンを落とす必要はなかっただろう。」と語っていた。この言葉には、敵に対する嫌悪感だけでなく、遣る瀬ない悲しみや怒りも込められていたと思う。

本書では、〝戦争〟の恐ろしさを平凡な市民の視点から考えることができる。それ故、共感できる部分も多くあった。私は、この本を通し、〝戦争〟というものをよく理解する必要があると思った。〝戦争〟は良くないということは、世界的にも多くの人々が思っていると思う。しかし、今日〝戦争〟という殺人が起こり、再び〝戦争〟の〝悲劇〟がくり返されようとしている。実際に今、ロシアがウクライナに侵攻し、多くの人々が深い悲しみの中にいる。多くの人々が自国の〝正義〟を背負い戦っている。私は、それぞれの国が異なる〝正義感〟を持ち、すれ違いを起こしてしまうことは仕方がないことだと思う。だが、それを理由に、力を行使し、お互いを傷つけあって物事を解決しようとすることは、許されない行為だと思う。〝戦争〟を行わずとも解決する方法は必ずあったはずだ。また、〝戦争〟を起こす前に、〝戦争〟がどういうものなのかを考えなおす時間はあったと思う。第一に、〝戦争〟のことをよく理解していれば、〝戦争〟を起こす気になどなれないはずだ。だからこそ、一人一人が〝戦争〟を〝恐ろしいもの〟という単調的な言葉で終わらせずに、〝戦争〟をきちんと理解し、二度と起こさせないという強い意志を持つことが大切だと思った。

対象作品／重松清著『きよしこ』新潮社

中学校三年の部　佳作

お話に花をさかせて

弘前大学教育学部附属中学校　高橋　彩

今の自分は、どのくらい心の中の自分とお話ができているだろうか。

私はこの物語を読んで、きよしに会って、そう考えるようになった。だから、考えれば考えるほど、悔しい。きよしに

負けたのだ。きよしは、吃音持ちの少年。転校生。転校生あるある、人生で何度もある、魔の自己紹介。私もきよしとは理由は違うが、自己紹介がきらいだ。どこを見て話せばよいか、何を話せばよいか。教壇の前に立つだけで緊張するし、何か盛り上がるようなことを言おうと思うと、結局、ありきたりなことを言って終わってしまう。悔しい。きよしは、自分の名前をうまくしゃべれない。吃音でカ行や夕行、濁音もうまく言えない。自分の名前こそ自信を持てるが言いたくても言えない。とっても悔しい。私はよく、自分の気持ちをきちんと自分の口で伝えなさいと言われる。別に自分はがまんして言っていないわけではないし、特に言いたいこともないし。なんだか悔しい。もしかしたら、心の中の自分が壁をつくってしまっているのかもしれない。それはとっても悲しい。言葉をうまくしゃべれる人が自信がないからだとか、しゃべるとバカにされるだとか、そんなので言わないのはルール違反だ。もったいないと思う。今の若者、私を含めて、直接口で伝えるという機会が減っているだろう。ＳＮＳを利用する人が増え、どんどん新しい若者言葉が世の中を変えていき、きたないコトバ、自分を自虐するコトバ、意味もわからずに死ねというコトバを言ってみたり。そういう人々は、とっても残念だ。私も悲しくなる。そういう人々の心も悲しむ。きよしはもっと悲しむ。だから、きよしは悔しい。

きよしは成長した。吃音もあまり良くならず、小学生の魔の自己紹介から中学生、高校生と、あっという間に十二年がたった。きよしは、好きになってくれた女の子と、少年と呼ばれる時代の最後を共に過ごす。青春だ。最初で話したように、心の中の自分が壁をつくってしまったり、自信がなくて言えるのに言わなかったりするのは、恋愛も同じだと思う。自分が片思いをしていて、気持ちを伝えたいのに、フラれるかもしれないだとか、もしフラれたら明日学校に行けなくなりそうだから、とかで、結局、言わなくて片思いで青春が終わってしまう。そういう思いをしたことがないだろうか。そういう思いを一度でもしたことがある人は、きよしの気持ちを少しはわかるのではないだろうか。ただただ悔しくて、悲しくて、つらい。私はそう思う。誰かを思い、寄りそい、相手を理解しようとする、そういった思いやりが、心の中の自分とお話をするという意味だと思う。きよしと付き合っている女の子、ワッチは、きよしの吃音、気持ちを理解しようと通訳をしてくれた。そういうことは相手を好きでないとできないことかもしれないが、自分がそういう立ち場になったとき、心からそう思えるか。途中できらいになったりしないか。私の心の中の自分はどう思っているのかな。お互い幸せだと、いいのかな。

この物語を通して、学んだことは多かったが、それらを全て使うことは難しいと思う。心の中の自分がいるから。今の私は、どのくらい自分の心とお話ができているだろう。心の

中の自分は、今の私に何を伝えてくれているのだろう。自分は何をすれば正しいのだろう。自分とは何か。そう問い続ける日々は続くだろう。

どうか、これからは心の中の自分ときちんとお話をしてほしい。たくさんの人々に、自分の思いを伝え、相手を認め高め合い、楽しくお話するために言葉を使ってほしい。言葉は、人々の思いを目では見えない色や音で鮮やかに表現し、伝えている。だから、美しい言葉を心の中で感じてほしい。

この物語を読んでくれた人々に、お話の花がさきますように。

著者もきよしも、そう思っているだろう。

応募作品審査講評

小学校三年の部

田村　修

小学校三年の部には、市内六校から十三編の応募がありました。昨年度の約半分になってしまったことは少し残念ですが、出品された作品はどれもしっかり本を読み、一生懸命に書いたことがわかる感想文ばかりでした。私も丁寧に皆さんの作品を読ませてもらいました。子供らしい素直な考えや大人顔負けの考えもあり、感心したり、驚いたりしながら、伝えたいことは何なのかを感じ取ることができました。

第一席は、石岡実結さんの「くもの糸を読んで」です。芥川龍之介原作の『くもの糸』を読んで、自分が悪い心に負けそうな時、太くて強い優しい心を作りたいと述べていました。主人公カンダタのような悪人でも、くもの糸のように切れそうな細く弱い優しさがあり、それが自分さえよければという気持ちに負けた時に、ぷっつりと切れてしまうのだと表現しています。このことを現在の世界情勢に広げて考えていることに感心しました。戦争が起きている地域の人々の細い糸を繋いで、強い巨大クモの巣にして包んであげたいという実結さんの考えは素晴らしいと思いました。

第二席は、泉愛菜さんの「がんばらなくてもいいんだよ。」です。フランツ＝ヨーゼフ・ファイニク著の『わたしの足は車いす』を読んで、自分ができることをお手伝いしたいと述べていました。登場人物の心情を的確に捉え、その場に自分がいたらどんな言葉をかけてあげるか、自分だったらどのように接してほしいと思うかを考えて書かれています。足の不自由な主人公アンナの気持ちに寄り添い、「頑張り過ぎなくていいんだよ。」という優しさが伝わってきます。心のバリアフリーとは、こういうことではないかと考えさせられる感想文でした。

第三席は、中井太陽さんの「人間はいいものなのか」です。新美南吉著の『手ぶくろを買いに』を読んで、人間は怖くなくて優しいところもあることを、母さんぎつねに伝えたいと述べていました。新美南吉のテーマ「生存所属を異にするものの魂の流通共鳴」をしっかりと感じ取り、おもしろいと思った場面やどきどきした場面を自分の素直な言葉で表現しています。情景描写の美しさに触れている点も他の作品にはないよさでした。

小学生のうちに本を読むことで、読解力や語彙力、集中力が育つだけでなく、自分の感情をコントロールする力も付くと言われています。それまで知らなかったいろいろな世界を知ることができ、知識の蓄積にも役立つ読書を楽しんで、来年度はより多くの皆さんに読書感想文を応募してほしいと願っています。

小学校四年の部

佐藤信孝

新しい教科書では、多くの「書く活動」が組み込まれていて、書くという言語活動が重視されていることがわかります。読書感想文は、書く活動で培った言語能力と、読む活動で身に付けた言語能力を総合的に活用する力が必要となります。

あらすじや要旨は短くまとめなければならないし、自分が気になったところについては、自分の経験と照らし合わせながら考えをまとめなければなりません。中心となる語や文を捉える力や登場人物の変化にも着目する必要があります。また、書き出しで読み手を引き付ける工夫をしたり、一番伝えたいことが伝わるように構成を考えることも大切です。ですから、読書感想文は、指導する先生にとっては、非常に労力を要する学習なのです。

小学校四年の部には、八校より四十一編の作品が寄せられました。どの作品にも一人一人の思いが綴られていて、楽しく読ませていただきました。

第一席は、對馬朋笑さんの「幸せを考えて」です。宮沢賢治著『銀河鉄道の夜』を読んで、人の「死」を見つめ、「幸せとは何だろうと考えることが生きていくこと」とまとめています。抽象的な表現の中に見え隠れする作者からのメッセージを、登場人物の心情に寄り添いながら読み進めている對馬さんはすごいなあと感心してしまいました。読み終えた後の、

「心のおくでグワーッとうずまいておしよせた自分でもよくわからないこの気持ちは何なのだろう。」という表現は、死の悲しみを巧みに表していて驚きました。重いテーマについて考えながらも、「自分らしく生きるすばらしさ」の大切さを訴えて感想文をまとめているのも素晴らしいです。

第二席は、鈴木優衣さんの「親子のきずな」です。高橋宏幸著『チロヌップのきつね』を読んで、父ぎつねや母ぎつねの子ぎつねを思う愛情に共感し、自分の両親の思いに感謝したいとまとめています。物語の登場人物と自分の家族を重ね合わせ、自分の成長をふり返りながら、改めて家族の思いを想像して書いているところが素晴らしいです。

第三席は、別宮志郎さんの「研究って楽しいな」です。塚本勝巳著『うなぎ一億年の謎を追う』は、かなり専門的な内容の説明的文章ですが、読者の探求心を引き込むように、研究が進んでいきます。「○○についてわかった」とするのではなく、研究を進める筆者の思いに共感し、研究の面白さに改めて気付くという展開の仕方が素晴らしいです。

今回選んだ作品は、個性的で完成度の高い作品でした。読み終わって、一気に書いただけではこのような感想文にならないと思います。一度書いたものを見直し、構成を考えて書き出しや自分の体験を書き加えるなど、読書感想文と向き合う姿勢に敬意を表します。

小学校五年の部

地主尚子

今回の応募作品数は、三十編、応募校は七校です。読書感想文が意味のある学習になるのは、構成力や思考力が育ってくる五年生からだと私は考えています。来年度は、たくさんの学校が応募してくれることを願っています。

五年生にもなると、どの子も本の場面や言葉から自分のこれまでの経験を振り返ったり、強く心が揺さぶられたことをもとにして、作品を書いていました。また、今の自分の年令にふさわしい言葉で、感じたことや考えたことを素直に表現しており、全作品に好感をもてました。

ところで、今後の課題として次の二点をあげます。

①読書感想文ではなく、ただの意見文にならないように。例えば、「○○を知って驚きました。○○はだめだと思います。」は意見文です。どの本を読んでも書けそうな感想にならないこと。自分と登場人物を重ね合わせながら本を数回読み、感じたことを自分のこれからの生活にどう生かそうと考えたか等を書くとよいでしょう。

②書き出しを工夫しましょう。「その本を読むようになったきっかけ」から書き出している人が多かったです。読書感想文の書き方の一つの方法ではあります。「○○について考える本だから」「題名の○○に興味をもった」等という書き出しでもいいですが、読み手を引きつける書き方の工夫をしてみましょう。例えば、第一席の高山さんの書き出しは、「みなさんは〝クマ〟と聞いてどんなことを思い浮かべますか。」、第三席の小林さんの書き出しは、「皆さんはＳＤＧｓを知っていますか。」です。一気に読み手を作品世界に引き込むような、二人の書き方を参考にしてみて下さい。

さて、第一席の「マタギのおきてから学んだこと」は、高山さん（大成小）のものの見方・考え方が素直であり、自分の生活経験を通じての所感がにじみ出ている作品です。本との出会いによって気付いた母の言葉の意味、そして、その気付きから自然との共存の在り方について、最後まで力強く書き進められていた文章でした。作品を読み進めていくうちに、高山さんと直接対話しているような気持ちになりました。

第二席は「願いをかなえるためには」。三上さん（附属小）は、主人公の行動を自分に重ね合わせながら、努力することの大切さを感じ取りました。主人公の生きざまが、三上さんの将来の道標になったのですね。心を揺さぶられた本との出会いは、とても貴重な経験になったと思います。

第三席は、小林さん（城西小）の「みんなハッピー」。障害をもった人が一生懸命に生きている姿から、障害とは何なのか、その本質に考え至った作品となっています。最後の一文、「障害があってもなくてもみんなが幸せにくらせるっていいなあと思いました。」は、小学生らしい素直な感想。むやみに道徳的にまとめなかったのが良かったです。

小学校六年の部

小山内　早　苗

読書に関する高学年の目標は、「進んで読書をし、国語の大切さを自覚して、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う」です。これを指標に、お寄せいただきました二十八編の読書感想文をじっくり読みました。応募作品の中で入賞した作品は、文と文の間、「行間」もていねいに読んで考えた作品が多く見られ、六年生の書く力の素晴らしさを感じました。

第一席の佐々木さんの読書感想文は、本との出会いから日常生活や何のために勉強するのかということに対して考えを深め、最後には「自分の力で考えられる強い頭をつくろう」という決意表明を記しています。行間をていねいに読み進める様子が、効果的な引用部からも伝わってきます。本との出会いで気持ちが変化したことを心地よいリズムの文体と構成を生かして書き、読み応えのある読書感想文となっています。

第二席の山田さんの読書感想文の中には「あたり前」という言葉が繰り返し四回出てきます。冒頭の「自由があたり前」ということが、社会の授業や本を読み進める中で、とても尊いものだということに気付いていきます。作品の最後には、「世界中の人々と（中略）思いを共有して」ということが書き記されています。今日まだ続いている戦争を他人事とせず、自分事として考え、伝え合おうとする姿勢が素晴らしいです。

第三席の成田さんの読書感想文は、ジェンダーに関することがオープンになっていく現代社会を反映した作品になっています。本の中に読者である成田さんが入り込み、共感を深めながら「自分自身」と向き合っていく様子が、あたたかな雰囲気の中で描かれていて印象的です。多様性を受け入れ、寛容な社会に、ということがこの作品から伝わってきました。

佳作の三編の読書感想文は、それぞれが選んだ本から得た自分なりの思いを「自分を好きになるには」「こわいものがありすぎて」「希望の力」という方向にとらえなおして読書感想文にしています。こうすることにより、「○○を読んで感じたこと」という感想記録から、思いや考えを伝え合う対話へと内容が大きく動いています。吉田さんは「自分を好きになるために、自分の価値は自分で決める」ことを考えました。高橋さんが自己開示として、「こわいものがありすぎて」と題名にしたことにより、読まれた本と作品が、読み手の共感を強く引き付けました。花田さんの「希望の力」という題名は、読んだ本の内容と、最近毎日目にする戦いの映像を考え合わせることから、平和を願う気持ちが強く表れています。

今年は、収束の兆しが見えない感染症に加え、戦争という予期せぬ事態に世界中が心を痛めています。読書を通して事態をどう乗り越えていくかを考えている六年生に感心するだけではなく、大切にしたい思いや考えを伝え合う「対話」を充実させていかなければならないことを強く感じました。

中学校一年の部

福田裕子

今回、読書感想文の選者となり、講評を書くこととなった。誰かの作品に順位を付け、更にあれこれと言うのは、私にとっては少々苦手なことの一つである。しかし、引き受けたからには、この作業を完了させなければならない。それが引き受けたものの責任であるからだ。と、あらかじめ言い訳をして講評を始めたいと思う。

「読書は先哲との対話である。」と言われる。

先哲とは、一般的に「昔の優れた思想家、また、賢人。」と捉えられている。読書をすることで、昔の優れた思想家や賢人と対話をすることができ、その対話を通して、物事に対する見方や考え方を学ぶことができると考えれば、分かりやすいだろう。そして、学んだことを自分の人生に生かしていくことができればよい。先哲も、対話を通して教えたかいがあるという感じだろうか。

確かに、昔の思想家や賢人と対話し、物の見方や考え方を学び、自分の生き方に生かしていくことは、よりよい人生を歩んでいくうえで必要であろう。では、誰を先哲として対話するのか。

もちろん、著名な思想家や尊敬する研究家、アスリートや有名人といった、その本の著者でもよい。しかし、今回の読書感想文で先哲となったのは、祖父や小学校の先生、そして、過去の自分である。読書感想文を書く時、どうしてもありがちなのが「この文章を読んで、私は筆者の…という考え方に共感しました。そして、自分でもこれから…していこうと思います。」というものである。つまり、読書を通して、著者を先哲とし、対話しているのである。それでも構わないのだが、今回選ばせてもらった三人は、そこからもう一歩踏み出して、祖父や小学校の先生、そして、過去の自分を先哲としていたところに、私は魅力を感じた。

特に第一席に選んだ生徒の「最後にもう一度考えた。祖父は、勉強が本当に好きだったのかな？（以下省略）ぼくは祖父似らしい」の一言が素晴らしいこの生徒は、読書を通して祖父と対話し、対話しながら祖父に対して疑問と考えを巡らせているのである。そして、「遊びも部活もそして勉強でも今は我慢して続けてさえいれば、もしかしたら、今後はどこかでやる気があがり、今より勉強が楽しくなるかもしれない（以下省略）。」と締めくくっている。祖父との対話を通して、いつかは勉強が楽しくなるかもしれない、だから今は多少我慢しても勉強を続けようと学んでいるのである。これこそが「読書は先哲との対話である。」ではないだろうか。

読書を通して、著者の向こうにいる存在に気づき、対話し、多くのことを学ぶ生徒が増えることを願い、講評を閉めたいと思う。

中学校二年の部

野　呂　夕　加

中学校二年の部には、今年五十七編の応募がありました。青少年読書感想文コンクールの課題図書から、それ以外の話題の書籍まで、多岐にわたる本が選ばれていました。たくさんの素敵な感想文を通して、いつしか私自身が本の世界へ誘われ、一緒に立ち止まって考えたり、感動したりしながら幸せを感じるよい機会となりました。

第一席「心から向き合うこと」

一生に一度、死者との再会を叶えてくれる「使者」と、さまざまな事情を抱えた人たちの物語を通して、その再会がもたらすものとはなにかをテーマにした連作小説の中から、親友を失った女子高生の話に焦点を当てた久保さんは、登場人物に自分を投影して考えたり、一歩離れたところから「親友」「嫉妬」「死」について考えたりしていました。やがて、久保さんがこの本を通して出会ったのは「祖父を亡くした自分」でした。大切な人を失っても、すぐにはその実感を得ることができなかった自分、大好きだった祖父に伝えられなかったこと、そして生きていることの素晴らしさと、人と向き合うことの大切さを、静かに、しっかりと噛みしめる姿が伝わってきました。

第二席「久蔵と共に願う」

今日現在も日本から離れた国で起こっている戦争。そして七十七年前に戦争をしていた日本にいて、戦争について知らない自分に気付いたことから、手に取った一冊。「知ること」の大切さ、家族や周りの友人の大切さ、平和な毎日が当たり前でないことに気付いていく中田さんの姿が、ものすごい勢いで伝わってきました。生きようとした久蔵が、なぜ特攻隊として自ら死を選んだのかという問いに答えを見つけられないとした中田さん。これからもその答えを問い続けていってほしいと思います。

第三席「時代を創った葛飾北斎」

葛飾北斎の浮世絵はあまりにも有名で、知らない人はいないのに、葛飾北斎その人に関してはほとんど知られていないといっても過言ではありません。橋本さんはこの本を通して、葛飾北斎を知ることで、その人となり、生活、尽きない意欲と好奇心に自らを省みて、新しい自分に出会っています。自らを変えることができるのは、外からの働きかけではなく、内からの目覚めや気づきによるもの。新しい自分に出会えた喜びが生き生きと伝わってきました。

誰かの物語をたどり、その生涯に触れる過程を通して、気づかなかった自分や、新しい自分に出会うことが本を読むこと、その感想を記すことの醍醐味ではないでしょうか。本と読書感想文を通じて、これからも、たくさん「自分」に出会う旅に出てほしいと願っています。

中学校三年の部

佐藤　真紀子

今回、中学校三年生の作品を読ませていただき、以前に比べて、文体や表現技法など、著者の述べ方に関する批評の表現が多くなったと感じました。クリティカルリーディングを取り入れたりする、昨今の国語の授業の影響もあるのかもしれません。文体がわかりやすいとか、表現が伝わりやすいとか、作品を客観的に分析して述べることもいいのですが、やはり、その作品世界に入り込み、登場人物の心情に近づき、作者のメッセージを受け取った自分はどう考えたか、どう自分が変容したかを綴った感想文のほうが、他者の心を動かすと考えます。そういうところも考えて作品を選びました。

第一席　「自由と平和」

自分たちの自由は「平和のうえに成り立った大切な権利である」ことを、ロシアによるウクライナ侵攻が起こってしまった現代と、日本が戦争に参加していた『二十四の瞳』の時代を重ね、比べて考えた成田さん。戦争によって再び自由を奪われることがないようにしていきたいと、未来を見据えた強い気持ちで結んでいます。昭和の名作を読み、人間にとっての恒久的なテーマにきちんと向き合っている作品です。構成もよく、成田さんの思いが素直に伝わってきます。

第二席　「死について考えること」

『ツナグ』を読んで「死」への向き合い方を意識し始めたという平賀さん。先の見えないコロナ禍と、ロシアによるウクライナ侵攻という世界の現実も、考えをぐっと深めるきっかけになったようです。「今ある出会い」を大切にしながら「死」についても考え続けていこうという、生きることへの誠実さが感じられる作品です。

第三席　「誰もが自分らしくあるために」

「多様性」についての考えを綴った作品です。「少数派」でも自分の意見をきちんと発信していくことの大切さ、誰もが平等になるためには、「多数派」の視野の広さや優しさが必要と考えた八木さん。自分だけでなく社会全体が幸せになることを考えています。

十月末、群馬県前橋市で「前橋ブックフェス」が開催されました。自分はもう読まないけど、誰かに読んでもらいたい本が全国から前橋に集まり、読んだことのない本との出会いを求めて集まってきたたくさんの人々。選んだ本は何冊でももらえるのだそうで、なんとすてきな、本との出会いの「場」でしょう。どこの町にも書店が少なくなりました。でも良い本とは出会いたいものです。考えるきっかけをもらい、深く感動してその世界にひたれる本に。たまには弘前図書館に出かけたり、学校の先生方の本の紹介に耳を傾けたりして、自分だけの大切な一冊に出会ってほしいと願っています。

○努力賞一覧

☆小学校三年の部

弘前大学教育学部附属小学校　櫻庭綾乃
弘前市立北小学校　工藤康司
弘前市立福村小学校　太田維伸

☆小学校四年の部

弘前大学教育学部附属小学校　松村実和
弘前市立朝陽小学校　古川好瞳
弘前市立大成小学校　五十嵐らん

☆小学校五年の部

弘前市立北小学校　古川杏々羽
弘前市立北小学校　成田真千子
弘前市立北小学校　横田咲希
弘前大学教育学部附属小学校　久保徹馬

☆小学校六年の部

弘前市立相馬小学校　朝倉樹平
弘前市立相馬小学校　宮川陽
弘前市立相馬小学校　小笠原百優
弘前大学教育学部附属小学校　川村心愛
弘前市立相馬小学校　蝦名優晴

☆中学校一年の部

弘前市立第三中学校　種市絢
弘前大学教育学部附属中学校　三浦万知
弘前大学教育学部附属中学校　川村友紀乃

☆中学校二年の部

弘前大学教育学部附属中学校　太田万葉
弘前市立第一中学校　中村心優
弘前市立第三中学校　村上永佳

☆中学校三年の部

弘前市立第一中学校　熊野莱安奈
弘前市立第二中学校　山本萠々奏
弘前市立津軽中学校　鈴木詩乃
弘前大学教育学部附属中学校　伊藤美瑠
弘前大学教育学部附属中学校　橋場英太郎

○感想文の対象となった図書

☆小学校三年

〔書名〕〔著者名〕〔発行所〕

ワタオウサギのラグ　アーネスト・T．シートン　童心社
みんなのためいき図鑑　村上しいこ　童心社
走れメロス　くもの糸（10歳までに読みたい日本名作3）　芥川龍之介　学研プラス
いなかのねずみとまちのねずみ　アイソポス　偕成社
チョコレート戦争　大石　真　理論社
手ぶくろを買いに　新美南吉　偕成社
ひかる石のおはなし　小手鞠るい　あかね書房
わたしの足は車いす　フランツ＝ヨーゼフ・ファイニク　あかね書房
セラピードッグのハナとわたし　堀　直子　文研出版

☆小学校四年

〔書名〕〔著者名〕〔発行所〕

きつねとぶどう　坪田譲治　白泉社
かあちゃん取扱説明書　いとうみく　童心社
ドキドキッズ小学校　4時間目　テンション急上昇　川北亮司　文溪堂
おじいちゃんとの最後の旅　ウルフ・スタルク　徳間書店
チロヌップのきつね　高橋宏幸　金の星社
ココロ屋　つむぎのなやみ　梨屋アリエ　文研出版
お昼の放送の時間です　乗松葉子　ポプラ社
サングラスをかけた盲導犬　手島悠介　岩崎書店
恋とポテトと文化祭　神戸遥真　講談社
オタク偉人伝　すごい人ほどぶっとんでいた！　小川晶子　アスコム
ヘレン・ケラー　砂田　弘　ポプラ社
鬼遊び2　地獄のお囃子　廣嶋玲子　小峰書店
SFショートストーリー傑作セレクション　超能力篇　星　新一　汐文社
まほうのほうせきばこ　吉富多美　金の星社
怪盗クイーンに月の砂漠を　はやみねかおる　講談社
めいちゃんの５００円玉　なかがわちひろ　アリス館
ハンカチともだち　なかがわちひろ　アリス館
ぼくのちいぱっぱ　長江優子　ゴブリン書房
うなぎ一億年の謎を追う　塚本勝巳　学研教育出版
10歳のミッション　齋藤　孝　幻冬舎
チョコレートタッチ　パトリック・スキーン・キャトリング　文研出版
銀河鉄道の夜（10歳までに読みたい日本名作1）　宮沢賢治　学研プラス
みんなのためいき図鑑　村上しいこ　童心社

☆小学校五年

〔書名〕	〔著者名〕	〔発行所〕
宿題ひきうけ株式会社	古田足日	理論社
かがやけ！虹の架け橋	漆原智良	アリス館
明日香さんは負けない	福田隆浩	講談社
ほねほねザウルス11　だいぼうけん！ボコボコン・ホール	ぐるーぷ・アンモナイツ	岩崎書店
マタギに育てられたクマ	金治直美	佼成出版社
ねこと王さま	ニック・シャラット	徳間書店
ぼくらと七人の盗賊たち	宗田　理	ＫＡＤＯＫＡＷＡ
夜明けの巨大地震（マジック・ツリーハウス12）		
オオカミと氷の魔法使い（マジック・ツリーハウス18）		
南極のペンギン王国（マジック・ツリーハウス26）		
	メアリー・ポープ・オズボーン	ＫＡＤＯＫＡＷＡ
わたしたちの戦争体験　日本児童文芸家協会　学研教育出版		
きみは一人ぼっちじゃないよ	波平恵美子	出窓社
森のネズミのおくりもの	岡野薫子	ポプラ社
ファーブル昆虫記4	ファーブル	集英社
お話きかせてクリストフ	ニキ・コーンウェル	文研出版
こども六法	山崎総一郎	弘文堂
マルガリータと森のまもの	工藤ノリコ	あかね書房
丑三つ時レストラン	松谷みよ子	童心社
ヘレン・ケラー物語	東多江子	講談社
りんごの木を植えて	大谷美和子	ポプラ社
最後のオオカミ	マイケル・モーパーゴ	文研出版
つくしちゃんとおねえちゃん	いとうみく	福音館書店
願いがかなうふしぎな日記	本田有明	ＰＨＰ研究所
しろくまだって	斉藤　洋	小峰書店
坊っちゃん	夏目漱石	講談社
世界から猫が消えたなら	川村元気	小学館

☆小学校六年

〔書名〕	〔著者名〕	〔発行所〕
豆の上で眠る	湊かなえ	新潮社
容疑者Ｘの献身	東野圭吾	文藝春秋
つやのよる	井上荒野	新潮社
トイストーリー2	レスリー・ゴールドマン	偕成社
譲れぬ激闘	大野益弘	あかね書房
しろくまだって	斉藤　洋	小峰書店
リアル鬼ごっこ	江坂　純	小学館
かなしきデブ猫ちゃん	早見和真	集英社
アイドルがアイドルに恋しちゃだめですか？		
	小野はるか	ＫＡＤＯＫＡＷＡ
名探偵シャーロックホームズ　緋色の研究		
	コナン・ドイル	ＫＡＤＯＫＡＷＡ
トイストーリー	デュボウスキー	偕成社

小学生までに読んでおきたい文学5　ともだちの話　故郷　魯迅　あすなろ書房
文豪ストレイドッグス　DEAD　APPLE　岩畑ヒロ　KADOKAWA
捨て犬・未来、しあわせの足あと　濱野京子　今西乃子　岩崎書店
野原できみとピクニック　濱野京子　偕成社
ぼくのまつり縫い　神戸遥真　偕成社
ぼくらの太平洋戦争　宗田　理　KADOKAWA
アントン-命の重さ　エリザベート・ツェラー　主婦の友社
こども「学問のすすめ」　齋藤　孝　筑摩書房
たんぽぽ団のひみつ　重松　清　新潮社
ぼくの弱虫をなおすには　K．L．ゴーイング　徳間書店
鼻　芥川龍之介　集英社
建築家になりたい君へ　隈　研吾　河出書房新社
火垂るの墓　野坂昭如　ポプラ社
世界は「」で沈んでいく　櫻いいよ　PHP研究所
戦場の秘密図書館　マイク・トムソン　文溪堂
ぼくらの七日間戦争　宗田　理　ポプラ社
ラストで君は「まさか！」と言う　ささきかつお　PHP研究所

☆中学校一年

〔書名〕　〔著者名〕　〔発行所〕

今夜、世界からこの恋が消えても　一条　岬　KADOKAWA
ラストサバイバル　大久保開　集英社
犬部！　山田あかね　朝日新聞出版
魔女の宅急便　角野栄子　福音館書店
シェイクスピア物語集　ウィリアム・シェイクスピア　偕成社
ぼくらの七日間戦争　宗田　理　KADOKAWA
本日は、お日柄もよく　原田マハ　徳間書店
ぼくは本を読んでいる。　ひこ・田中　講談社
「のび太」という生きかた　横山泰行　アスコム社
あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。　汐見夏衛　スターツ出版
カラフル　森　絵都　文藝春秋
100万回生きたきみ　七月隆文　角川書店
オズの魔法使い　フランク・ボーム　岩波書店
野村の金言　野村克也　プレジデント社
時をかける少女　筒井康隆　KADOKAWA
時給三〇〇円の死神　藤まる　双葉社
ほんとうにあったオリンピックストーリーズ　日本オリンピック・アカデミー　講談社

今夜、もし僕が死ななければ　浅原ナオト　新潮社
ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー　ブレイディみかこ　新潮社
セカイを科学せよ！　安田夏菜　講談社
春夏秋冬代行者　暁　佳奈　ＫＡＤＯＫＡＷＡ
魔法の糸　ウィリアム・Ｊ・ベネット　実務教育出版
給食アンサンブル　如月かずさ　光村図書出版
ぼくは恐竜探険家！　小林快次　講談社
不思議の国のアリス　ルイス・キャロル　角川書店
生きもののおきて　岩合光昭　筑摩書房
きよしこ　重松　清　新潮社
孤独と不安のレッスン　鴻上尚史　大和書房

☆中学校二年

〔書名〕　〔著者名〕　〔発行所〕
星の王子さま　サン・テグジュペリ　岩波書店
人間失格　太宰　治　筑摩書房
余命３０００文字　村崎羯諦　小学館
愛されなくても別に　武田綾乃　講談社
蜜蜂と遠雷　恩田　陸　幻冬舎
江戸川乱歩名作ベストセレクション２―１　江戸川乱歩　ゴマブックス
西の魔女が死んだ　梨木香歩　新潮社

ぼくらの七日間戦争　宗田　理　ＫＡＤＯＫＡＷＡ
あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。　汐見夏衛　スターツ出版
本当の「心の強さ」ってなんだろう？　齋藤　孝　誠文堂新光社
人は見た目！と言うけれど　外川浩子　岩波書店
戦国姫　藤咲あゆな　集英社
ふたり、この夜と息をして　北原　一　ポプラ社
ひらいて　綿矢りさ　新潮社
ライオンのおやつ　小川　糸　ポプラ社
また、同じ夢を見ていた　住野よる　双葉社
「自己肯定感」が上がる１００の言葉　千田琢哉　学研プラス
星を掬う　町田そのこ　中央公論新社
赤の他人だったら、どんなによかったか。　吉野万理子　講談社
モモ　ミヒャエル・エンデ　岩波書店
小説天気の子　新海　誠　ＫＡＤＯＫＡＷＡ
いつか、君の涙は光となる　春田モカ　スターツ出版
死にたがりの君に贈る物語　綾崎　隼　ポプラ社
一瞬を生きる君を、僕は永遠に忘れない。　冬野夜空　スターツ出版
永遠の０　百田尚樹　講談社

温室デイズ　瀬尾まいこ　角川書店
本日は、お日柄もよく　原田マハ　徳間書店
片想い　東野圭吾　文藝春秋
誰かのために生きてこそ　白方誠彌　幻冬舎
人間椅子　江戸川乱歩
ビブリア古書堂の事件手帖　～栞子さんと奇妙な客人たち～　三上　延　アスキー・メディアワークス
かがみの孤城　辻村深月　ポプラ社
レゾンデートルの祈り　楪　一志　ドワンゴ
リセットする力　酒井宏樹　KADOKAWA
海を見た日　M．G．ヘネシー　鈴木出版
江戸のジャーナリスト葛飾北斎　千野境子　国土社
一人っ子同盟　重松　清　新潮社
好かれる人は話し方が9割　中谷彰宏　リベラル社
ツナグ　辻村深月　新潮社
いのちをはぐくむ農と食　小泉武夫　岩波書店
黒い雨　井伏鱒二　新潮社
夏の騎士　百田尚樹　新潮社
ああ無情　ビクトル・ユーゴー　講談社
カレーライスを一から作る　前田亜紀　ポプラ社

☆中学校三年

〔書名〕　〔著者名〕　〔発行所〕

奇跡のバックホーム　横田慎太郎　幻冬舎
豆の上で眠る　湊かなえ　新潮社
もしキミが、人を傷つけたなら、傷つけられたなら　犯罪学教室のかなえ先生　フォレスト出版
アルジャーノンに花束を　ダニエル・キイス　早川書房
食品の裏側　安部　司　東洋経済新報社
銀河鉄道の夜　宮沢賢治　新潮社
片眼の猿　道尾秀介　新潮社
監獄に生きる君たちへ　松村涼哉　KADOKAWA
今夜、世界からこの恋が消えても　一条　岬　KADOKAWA
流星ワゴン　重松　清　講談社
十一月のマーブル　戸森しるこ　講談社
放課後音楽室　麻沢　奏　スターツ出版
タカラモノ　和田裕美　双葉社
もしも徳川家康が総理大臣になったら　眞邊明人　サンマーク出版
461個のおべんとう　丸山　智　朝日新聞出版
真夜中のパン屋さん　大沼純子　ポプラ社
パンツ・プロジェクト　キャット・クラーク　あすなろ書房

あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。　汐見夏衛　スターツ出版
真夜中の底で君を待つ　汐見夏衛　幻冬舎
恥知らずのパープルヘイズ　上遠野浩平　集英社
ＯＶＥＲ　ＨＥＡＶＥＮ　西尾維新　集英社
博士の愛した数式　小川洋子　新潮社
ツナグ　辻村深月　新潮社
10代の本棚　あさのあつこ　岩波書店
きみが見つける物語　恋愛篇　有川　浩　角川書店
きよしこ　重松　清　新潮社
羅生門・鼻　芥川龍之介　新潮社
カラフル　森　絵都　文藝春秋
その情報はどこから？　猪谷千香　筑摩書房
ぼくの宝物絵本　穂村　弘　河出書房新社
二十四の瞳　壺井　栄　角川書店
それでも人生にイエスと言う　Ｖ・Ｅ・フランクル　春秋社
ひとり　吉本隆明　講談社
危機の現場に立つ　中満　泉　講談社
学ぶこと思うこと　加藤周一　岩波書店
解剖学教室へようこそ　養老孟司　筑摩書房
ボクの音楽武者修行　小澤征爾　新潮社
黒い雨　井伏鱒二　新潮社
紙の建築行動する　坂　茂　岩波書店

赤毛のアン　Ｌ．Ｍ．モンゴメリ　新潮社
鼻　芥川龍之介　ＫＡＤＯＫＡＷＡ
夏の騎士　百田尚樹　新潮社

○読書感想文コンクール応募学校と応募作品点数の推移

	小学生の部		中学生の部	
	応募校数	応募作品数	応募校数	応募作品数
第1回	18	230	4	38
2	22	265	5	40
3	22	211	7	51
4	17	222	9	75
5	23	250	10	74
6	19	233	8	64
7	17	197	11	108
8	16	199	8	87
9	16	143	7	60
10	13	79	9	115
11	18	109	8	97
12	13	83	6	109
13	12	80	7	121
14	15	77	9	95
15	16	133	9	139
16	13	125	8	101
17	17	104	8	114
18	17	107	8	113
19	24	132	10	121
20	20	114	9	116
21	21	121	9	151
22	17	69	10	132
23	15	80	11	125
24	15	107	10	121
25	19	137	8	91
26	17	143	10	70
27	16	97	12	82
28	16	73	6	61
29	14	86	8	65
30	16	66	7	78
31	17	67	7	78
32	14	63	7	66
33	16	94	6	60
34	17	97	8	67
35	18	92	8	71
36	17	91	7	54
37	19	87	7	56
38	17	74	7	58
39	19	99	9	70
40	19	116	6	54
41	15	106	7	61
42	17	91	6	88
43	15	84	10	83
44	20	139	9	99
45	17	107	7	95
46	19	143	11	145
47	20	145	11	167
48	18	189	9	114
49	21	196	8	172
50	21	174	8	78
51	16	145	10	167
52	18	129	12	172
53	16	114	11	152

○2022年度　第53回読書感想文コンクール応募作品数

	部門別	応募作品数		部門別	応募作品数
小学生	3年 4年 5年 6年	13（25） 41（53） 30（22） 30（29）	中学生	1年 2年 3年	40（61） 57（52） 55（59）
合　計		114（129）	合　計		152（172）

※（　）内は前年・第52回応募作品数

令和４年度　第53回
弘前市小・中学生読書感想文コンクール応募要項

一、趣　旨　本市における読書普及活動の一環として、市内の小・中学校を対象に行うもので、読書に対する関心を高めるとともに、鑑賞力と作文力向上のための一助とします。

二、主　催　弘前市教育委員会　主管　弘前市立弘前図書館（指定管理者）

三、後　援　株式会社東奥日報社／東奥日報文化財団／株式会社陸奥新報社／アップルウェーブ株式会社／弘前ペンクラブ（順不同）

四、応募要領

(1) 対象者　弘前市内の小学校３年生以上の児童及び中学校生徒とします。

(2) 対象作品　感想文の対象とする作品は、文学作品と限らず書籍として発行されているもの。ただし、教科書等に掲載されている作品と漫画、コミック、写真集、画集、図鑑、地図等は対象外とします。

(3) 応募方法　応募原稿は、各校でとりまとめのうえ出品するものとします。

(4) 応募先　弘前市立弘前図書館
〒０３６－８３５６　弘前市大字下白銀町２番地１
電話３２－３７９４

(5) 締め切り　令和４年９月９日（金）

五、応募原稿

(1) 用　紙　Ｂ４判４００字詰め縦書き原稿用紙とします。

(2) 筆記用具　原則として鉛筆（ＢまたはＨＢ）・ボールペン（黒）とします。

(3) 枚　数　小学校 …… 原稿用紙　２～３枚
（ただし６４０字以上とする）
中学校 …… 原稿用紙　４～５枚
（ただし１３００字以上とする）
（公益財団法人全国学校図書館協議会主催　青少年読書感想文コンクールに準拠）

(4) 題名等　応募原稿の頭書には、感想文の「題名」と「学校名」・「学年」・「氏名」だけを記載し、他事は記載しないこととします。以上は、３行以内に収め、４行目から本文に入るものとします。

(5) 使用漢字
①小学校は学年の教育課程に応じたものを用い、学年を超える漢字はふりがなを付けてください。また、人名や地名を除き常用漢字表以外の漢字を使用しないでください。
②中学校は常用漢字表以外の漢字はふりがなを付けてください。
③対象作品の引用は、カッコ書きでそのまま原稿に記入してください。
④入選作品集「文集はと笛２０２２」の刊行においては、読みやすいようにするため、使用漢字を改変させていただく場合があります。

(6) 応募票　応募原稿には次の事項を記載した応募票を貼付してください。
①　感想文の題名　②　所属学校名　③　学年　④　氏名
⑤　感想文の対象となった作品に関する書誌的な事項

(7) その他　応募原稿は本人の手書きとし、他のコンクールと重複して応募していないものとします。

※以上の事項を満たしていない作品は、審査から除外することもあります。

六、審　査　応募した作品は、次の７部門に区分し、各部門ごとに第一席、第二席、第三席を各二編、佳作及び努力賞を各数編決定します。
小学校…三学年の部、四学年の部、五学年の部、六学年の部
中学校…一学年の部、二学年の部、三学年の部

七、審査委員（順不同・敬称略）
櫛引　洋一　弘前市立郷土文学館　企画研究専門員
地主　尚子　弘前市国語教育研究会（高杉小）
佐藤　信孝　弘前市国語教育研究会（船沢小）
小山内　早苗　弘前地区小学校学校図書館教育研究会（朝陽小）
田村　修　弘前地区小学校学校図書館教育研究会（自得小）
野宮　夕加　弘前地区中学校教育研究会国語部会（相馬中）
福田　裕子　弘前地区中学校教育研究会国語部会（第二中）
佐藤　真紀子　弘前地区中学校教育研究会国語部会（南中）
※協力機関　弘前地区中学校教育研究会国語部会

八、入選発表　コンクールの審査結果は、各学校へ通知するほか、東奥日報及び陸奥新報紙上、弘前市ホームページで発表します。また、11月26日（土）に弘前市立弘前図書館において表彰式を開催し、入選者に賞状及び商品を贈ります。

九、入選作品集「文集はと笛２０２２」

(1) 第一席・第二席・第三席及び佳作に入選した作品は、「文集はと笛２０２２」に収録し、小・中学校、県内公立図書館などへ配布します。

(2) 「文集はと笛２０２２」に収録した作品は、弘前市ホームページにも掲載し、利用者に広くご覧いただくこととします。

十、その他

(1) 応募原稿は「文集はと笛２０２２」の配布と同時に返却いたします。

(2) お問い合わせ先　弘前市立弘前図書館　電話３２－３７９４

編集後記

▼昭和四十五年度に開始した弘前市小・中学校読書感想文コンクールも、今年で第五十三回目を迎えました。当時発行された弘前図書館報八十五号（昭和四十五年九月一日付）によると、第一回目の応募内容は現在と多少異なり、学年ごとではなく小学生の部と中学生の部の二部門からなり、それぞれ第一席各一篇、第二席各三篇、第三席各五篇、佳作各数篇となっていました。また、応募原稿用紙も四百字詰原稿用紙十枚以内となっており、現在の小学生が原稿用紙二～三枚以内、中学生が原稿用紙四～五枚以内よりは多くなっていました。また、審査員には、弘前高校校長・中央高校校長・弘前市教育研修所指導主事・時敏小学校校長・高杉小学校校長・市国語教育研究会会長などの先生方が審査を行ってくださっていました。

　第一回目のコンクールから半世紀以上が経過しましたが、今も昔も暑い季節に読書に勤しみ、一生懸命に読書感想文を書いてくれた児童生徒のみなさん、たいへんおつかれさまでした。また、ご多忙にもかかわらずご指導いただいた先生方や作品の審査に携わっていただいた先生方に深く感謝申し上げます。

　昭和四十五年の頃、一般家庭に白黒テレビが普及し、夏には扇風機で過ごしていましたが、現在はエアコンをかけながら4Kテレビで過ごす時代となり、生活スタイルも大きく変化してきました。そして、パソコンやネットの普及に伴い、書籍についても電子書籍による読書愛好家も増え始めています。このように時代は変化してきましたが、媒体にかかわらず、みなさんが読書を通じて豊かな心を培い、未来に向かって広い視野を持ち、何よりも読書を好きになることを願っています。

（黒滝雅信）

▼昨年度に引き続き、今年度も読書感想文コンクールの担当をさせていただきました。毎年たくさんの応募を頂いておりますが、今年度も応募総数二百六十六点と、多くの素晴らしい作品が集まりました。皆さんの作品を読ませていただきましたが、本を読むことが好きでたまらないという子もいれば、本を読むのは少し苦手という子もいて、苦手でもがんばって読書感想文を書いてくれたことをうれしく思います。

　自分に合った一冊を選び、読書感想文を書くということは容易なことではありません。しかし、応募された皆さんは、「これぞ！」という一冊に出会い、そこからたくさんのことを吸収していました。本を読み、客観的に今の自分を見つめ、はたしてこれでいいのか、もっと自分にもできることがあるのではないかなど、前向きな気持ちや、他者に対する思いやりや配慮、ご両親に対する感謝の思いが綴られており、読んでいてとても胸が温かくなると同時に、私自身、気付かされたことが数多くありました。

　最後になりますが、作品を応募していただいた児童、生徒の皆さん、またその指導にあたられた先生方、そしてお忙しいなか、審査をお引き受けいただきました先生方に感謝を申し上げます。そして、今年度参加できなかった皆さん、ぜひ来年度のコンクールの応募をお待ちしております。

（猪股邦子）

装丁
装画　佐竹　唯

文集　はと笛　2022
令和五年一月十八日　印刷
令和五年一月二十五日　発行
編集　弘前市立弘前図書館
発行　弘前市大字下白銀町二―一
弘前市立弘前図書館